表紙, 目次, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38420

明治四十二年三月發行

自第五三号
至第六一号

十全會雜誌

《非賣品》

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第五十三號目次

○原著及實驗……自一頁

○動物試驗ニ由テ得ル毒物ノ証明ニ就テ　特別會員　溝口龍三

○擇捉兎爾義ノ一例　特別會員　吉尾開道

○色素性乾皮症ニ就テ　特別會員　齋藤義雄

○漫錄……自一八頁

○讀書餘錄……伊藤哲一

○秋山寒流……三野孤水

○友の家にて……碧潮生

○通信……自二九頁

○松原三郎君歸國畧記○田上清貞君通信○松久祐馬君通信

○會報……自四八頁

○叙任、辞令及其他○會員動靜錄○新年拜賀式○松原教授の新任○柔劍道寒稽古開始○陸軍衛生部依託生氏名○十全會講話會記事○十全會宛年賀狀送附特別會員氏名○體操學校生徒募集ノ件○學校衛生學例國彙報の特別提供○十全會々員名簿脫漏追加及訂正

○會告……自六〇頁

○寄贈及交換書目○十全會々費納付調書

○廣告

○數件

○附錄

○追想錄

漫錄

○讀書餘錄

伊藤哲一

（叙）讀むに從ひて抄したるもの敢て列次なきも寸珍百種少しの益もあらんとて集めたり

一、日本外科の始古事紀に曰く『其の八十神各稻羽の八上比賣を婚らんするの心あり共に稻羽に行く時に大穴牟遲神帋を負ひ從者となりて行く氣多の前に到る時裸の菟伏せり八十神其菟に謂ふよし汝は此鹽に浴み風の吹くに當り高山尾上に伏せよと其れ故に菟は八十神の敎のまゝに伏しき其海鹽乾くに從ひ其身の皮悉く風に吹きさかれ痛み苦んで泣く最后に來ませる大穴牟遲の神其菟を見て告げて曰く今急に此水門に行き水にて汝の身を洗ひ即其水門の蒲黃を取り敷き散らして其上に輾轉せば即汝の身本層の如く必ず差はん其敎の如くして本の如くなりき』云々即ち是れ外傷に蒲黃を用ゐたるなり

二、余ノ最モ傲ラントスルハ我ガ紀ノ國殊ニ余ノ家ヲ去ル數町ノ地ニ產セル華岡青洲氏ノ華岡流外科學創始者トシテ日本外科學界ニ九鼎大呂ノ重キヲナサシメタルニアリ。

日本醫譜ニ曰ク『華岡青洲名震字伯行通稱隨賢青洲ハ其號ナリ本ト和田氏高祖某河內國華岡ニ居ル由テ氏トス六世ノ祖傳之亟畠山高政ニ事ヘ高政亡ビシヤ紀州ニ移リ那賀郡ニ居リ（抄者云フ那賀郡トハ余ノ郡ノ隣郡ニシテ和歌山市ヲ去ル七里東ニ位ス。平山ト云フ字ニアリ其住宅今猶豪壯ヲ極メタル大樹ニシテ余等幼時ヨリ出入シテ遊戲セリキ）祖父雲仙ニ至リ始メテ醫ヲ業トス青洲ノ父名ハ尙道母ハ松本氏兄弟五人青洲ハ其長子タリ幼ニシテ頴敏父祖ノ業ヲ嗣ギテ醫業ヲ研精セントシ京師ニ出デテ桃谷華洲山田靜齋ト交リ吉蓋南涯ニ從ヒテ氣血水醫學極講ジ大和研水ニ從テ外科ヲ修メ其他諸家ノ說ヲ參酌シ刻苦多年已ニ得ル所アリ去テ紀州ニ皈リ內外合一活物窮理ノ說ヲ唱ヘ古今漢蘭ニ析衷シテ從來因循苟且ノ軌轍ノ外ニ跳梁シ刄鑿鋸斷奇ヲ出シ新ヲ求ムルモ繩尺ノ守ルベキヲ失ハズ奇疾異病方書ニ載セザルモノト雖モ其豪膽英才ヲ以テ手ニ隨テ處置シ功ヲ奏セザルコトナシ世人推シテ元和后ノ一人トナシ病客踵ヲ接シテ其門ニ集リ四方ノ醫生亦多ク來リテ敎ヲ乞ヒ着籍ノ者千有餘人ニ居ル文久二年紀州侯ニ召サ

レテ其醫員トナリ後侍醫ニ准ジ特旨其邑ニ居ルコトヲ許サル（抄者是レヲ祖父母ニ聞ク邑ヨリ和歌山市ニ至ル七里ノ間紀ノ川ニ大舟ヲ艤裝シテ浮ベ其豪麗驚クニ堪ヘタリキト）天保六年十月病ヲ以テ沒ス年七十六（抄者云　子孫今ハ醫ヲ業トセズ多額納稅者トシテ優遊セリ、其青洲ノ弟鹿城大阪ニ於テ外科ヲ開キ其家猶盛ニ外科專門ナリ）

鎖肛　華岡先生ノ始メテ名稱ヲ下シタルモノ治術ハ陰門ノ傍ラ又ハ會陰邊ニ小孔アルハ彎消息子ヲ以テ探リ次第ニ肛門ノ方ヘ切リ指二本入ル位ニシテ綿ニ白雲ヲ貼シ挿入ス

乳癌　左手ニ岩根ヲ握リ岩ヲ運動セシメズ割破シテ瘡口ニ手ヲ入レ核ノ皮肉ヨリ離シ細絡ヲ悉ク截離シテ核ヲ出シ贅肉ヲシテ內ニ殘サシムベシ誤テ岩核肉中ニ殘ル時ハ岩ハ治スト雖モ必ズ發ス術中血絡ヲ斷テ血走レバ傳藥又ハ燒金ノ術ニテ止ムベシ核ヲ去ツテ后燒酎ニテ溫メ瘡口ノ瘀血ヲ洗ヒ去リ金瘡油ヲ塗リテ瘡口ヲ縫合ス

脫疽　指ノ關節ノ處ヲコロンメスニテ骨際迄切リ廻シ指ヲ臺ニ載セ鑿ヲ關節ノ上ニ當テ槌ニテ打テバ截ル、ナリ。

流注古ヘハ風腫、毒腫、風毒腫ト云フモ華岡先生ハ流注ト云フ名稱ヲ與ヘタリ先ヅ膿ノ成ルヤ否ヤヲ精驗シ後ニ針ヲ刺シ拔ク時橫ニ切テ針口ヲ開大シテ瘡口ヘ左突メイチャヲ挿入ス

鎖陰　華岡先生ノ下シタル名稱ナリ石淋是レハ Tripper 尿道結石ノ意味ニアラズシテナラント察セラル『押シ出ス時ハ前ニ出ル、龜頭ノ邊ニ押シ移ルコトアレバ口廣グルト隨分出ルモノナリ妄ニ切リ出ス時ハ縫合シテ後ニ尿道小サクナリテ通路宜シカラズ故ニ大抵デハ切ラズ前口マデコヌ時ハ陰莖ノ下邊ヨリ橫ニ截リ出ス』

其外痔瘻、兎唇、骨腫、橫痃、骨疽等ニモ敏捷果敢ノ刀ヲ加エラレタリ。嗚呼遠キ昔ニ於テ今日黃金時代ト誇ル外科手術ハ既ニ我ガ親愛ナル故山ニ於テ行ハレツヽアリシナリ。

特記スルベキハ華岡先生ハ此大手術ニ當リテ麻醉劑ヲ發明セラレタルコトナリ。即麻沸湯ト稱シ曼陀羅華八分、草烏頭二分、白芷二分、當歸二分、川芎二分、右細挫熱湯ニ扶ジ一二沸頻ニ攪拌シテ滓ヲ去リ溫服一二分間ニシテ昏暈スル

金創即現時所謂創切ハ縫合繃帶ニ嚴制アリ火酒ニ浸セル綿布ニテ創口及周圍ヲ洗拭シ次デ介者ヲシテ創口ヲ吻合セシメテ縫フ糸ト糸トノ間四五分ナルヲ通例トス創ノ大ナルモノハ其最深所又ハ最下位ニ綿撒絲ヲ挿ミテ瘀液ノ

排泄ヲ便ニス縫合終ルヰハ椰子油ヲ創ノ周緣ニ塗布シ創口ニ金創油ヲ貼シ次ニ三重ノ木綿ニ鷄卵白ヲ浸シテ創上ニ貼シ其上ニ三重ノ晒木綿ヲ置キ卷木綿(Verband)ニテ之レヲ束子シム。爾后每日繃帶交換シテ六七日ニテ絲緩シテ搖グヲ見テ是レヲ剪截スルヲ度トシ一絲宛間ヲ隔テ、去ルナリ

止血法ハ血管ノ壓迫局所結紮及烙鐵ヲ用ヰテ十全止血ノ目的ニ供ス

花岡先生ノ用ユル手術具ハ金創針、剪刀、毛引（ピンセット）彎消息子。スポイト、小手鋏、縫合針、糸（麻絲又ハ木綿糸ヲ三條撚合セタルモノ）木綿繃帶等ナリキ

先生更ニ股、膝、肘及下顎關節ノ脫臼、關節强直及瘢痕攣縮ニ對シテ起死回生ノ妙手術ヲ施サレタリ

山河優々今猶殘存シ先生ノ墓ヲ吊スル每ニ外科界ニ一道ノ暗示ト誘導ヲ垂レ給ヘト念ズルナリ。余ノ先生ノ墓碑ニ對シ及先生ノ遺品ヲ見ルゴトニ常ニ一種ノ刺戟ヲ心祕ノ琴線ニ觸レシムルヲ禁ズルコト能ハザルナリ。

之レヲ要スルニ先生ノ所說ハ漢蘭折衷派ニシテ持論トスル所ハ內外合一活物窮理ノ說ナリ『方に古今なし內外一理古に泥みては今に通ずべからず內に略しては外に治すべからず蘭を云ふもの理に密にして法に粗なり漢を奉ずるものは法に精にして跡に泥む故に我術治を活物に考へ法を窮理に出す』ト即チ理論ト實習ノ併行ノ要ヲ痛論セラレタルナリ

其治術ヲ說クヤ『凡そ病を療し其方を處し劑を製す必ず局法に拘らず藥餌の及ばぬ所は針灸之を治す針灸及ばぬ所は腹背を刳割せよ以て腸胃を湔洗すべし苟も以て人を活すべきもの爲さざるべけんや』ト以テ豪胆不羈ノ熱烈ナル研究心ヲ見ル醫聖ト云フモ豈ニ不可アランヤ

先生ノ遺書『瘍科神書、瘍科鎖言、金創要術、金創口授、外科摘要、疔瘡辨明、乳癌辨、膏方便覽アリ

鎖陰ヲ手術スルニ當リテニ『剪刀ヲ以テ尿道ノ下ヨリ膜ヲ切ル猶奧ニ薄皮アルアリ初メ指一本ニテ破リ其レヨリ二本ニテ開クベシ尿道ト陰門トハ薄皮一枚ニテ隔テタルニヨリ暴卒ニ手術スルベカラズソレヨリ尿道ニ導水管ヲ指シ置キテ肛門ノ方ヘモ大鯨篦ヲ入レテ目的トナシ両道ヘ切リ貫ケヌヤウ術ヲ施スベシ

痔瘻『病人ヲ側臥セシメ右手ニ彎消息子ヲ把リ漏口ヨリ肛門ニ向テ徐々ニ挿入シ左食指ヘ鹿角菜（ふのり）ヲ塗リ肛門ニ挿入シ露珠ヲ搜ルベシ淺所ニ出デアラバ指ヲ露珠ヘ添ヘ右手ニ右ヲ入レテ肛門ニ引クベシ消息子肛門ヨリ出デタラバ美濃紙ヲ幅三四分位ニ切テ絹絲ヲヨリ込ミ大サ元結ノ如クニシテ其絲ヲ露珠ヘ結ビ附ケ消息子ヲ元ノ穴ヘ引キ

戻シ絲ヲ貫キ紙ヲ枕ニシテ絲ヲ膝結ニ結ブ其後漏口ヘメイチヤ（和蘭語デガーゼノ事）ニ破敵ヲ塗リ挿入ス明日ニ至リ新ニ枕ヲ換ヘ絲ヲ結ビ直ス日ヲ經テ絲深ク切コミ瘡口廣クナリタラバ痔漏刀ヲタメテ圓クナシ漏口ヨリ肛門ニ貫キ一擧ニ斷截スベシ』

兎唇『先ヅ鋏ヲ以テ其欲タル所ヲ切リ次ニバンドヲ切リ其レヨリ疵ノ正中ヲ縫ヒ次ニ縫ヒ夫ヨリ下ヲ縫ベシ初メ鋏ヲ入ル時左の方の欲目ヨリ先ニ切リ縫ヒ終リテ無名異血竭ヲ鷄子白ニテ煉リ創口ヘ貼シカスカイ（抄者曰不明）或ハ卷木綿ヲ施スベシ』ト

知ルベシ其手術の根底ハ今日の新學說ト一致セルヲ嗚呼外科の神タル華岡先生ヨ後進の余等ニ光明ヲ與ヘヨ

（以上富士川ドクトル醫學史參照）

○秋山寒流

三野孤水

秋風蕭颯、翠葉、霜に醉ふて薄紅の色を粧へり。

金城の東、細草尙翠綠をとゞめ、小春日和うらゝかに、倉ヶ岳一帶の群山は近く帽廂に懸り、遠く白山の連峰、朝靄に包まれて、幽紫山肩に淡く、翠嵐山麓に濃かなり。

あゝ、なつかしき白山吾は汝の名に憧憬れの身となりしとと久し、いま四顧烟霧の裡に、やさしき麗姿を指點するを得たり。その翠鬟のうるはしさは無限の秋の態を藏し、嵐氣の搖曳と共に、四季自からなる趣と、その面白き雲のただずまいとは、悄立之れを久しふするを躊躇せざるを得ざりき。

その碧空をつきて、屹立せる麗姿は女神の如し、吾は幼より立山の嶮惡なるを聞けり。未だ蹈まざると雖も、過ぐる年の夏、日數淸らなる夕、遠望せしことあり。一見して其嶮峻、凛乎として雄々しく、奇峭雄大なるを知れり。其矗々聳立、天空を突けるは鬼神の姿なり。いま吾は白山の優姿を仰で歩す、其眺望の美しく、麗しく、温然玉の如き仙姿は常に雲を呼んで群峰を貫けり。げに白山は千秋萬古ろの色褪せず、その容變ぜずして北陸を瞰下す。誰か仰いで神姿を望むにあたり、心裡頓に敬畏の念迫るを覺ゑざるものあらむや。

金城より東數十町、田圃東南に拓け、見渡す限り野も、山も、杜も、丘も、水も、村も、濛々として霧湧きて白壁の殊に輝くを見る。

程なく坦々砥の如き大路を行くこと半里程、斜坂大に來りて、漸く山裡に蹈み入りしを知る、歩々、徑路漸く細くして巒峰左側に列をなし、高きあり、低きありて間

もなく、徑極めて細く、友は吾が後より來る。

倏忽、溪聲幽かに聞にたり。山端を右廻して、老杉蓊鬱たる林間を過くれば、溪聲大に響き、水鳥の刮々と啼くをきく、友は予が背を敲きて疾行せよと促す。吾は急走して水邊に到り顧みれば、友はすでにあらず。大聲友を呼ぶ、激聲大にして予が聲さらに響かず、汀を斜望すれば急流水石を洗ふ數間の下流に友あるを認む。即ち汀を走れば鏘々たる響きあり。是れ金城の南を横斷して洋々たる荒磯に濺ぐ犀川の流れなり。

對岸を見渡せば水鳥の飛ぶ所、怪岩水を堰止め、飛沫岩頭を洗ふ。激湍の奇飛跳踉する所、轔轕たる響きあり、急湍岸を弄する所、鏘々たる音あり。急射すれば細波爲めに起り、奔飛すれば大波爲めに躍る、散漫したる狂岩は、碧水を砥きて、清碧を强め、急湍奇岩を求めて礫石を放す。更に眼を轉して綠柳の邊りを望めば、流れ緩にして深漂に陰あり、鶺鴒の水を蹴りて波紋漂ふ中流に、雲影の浮動するを見る。即ち蒼空に仰げば白雲搖曳し、流れて遙かに對岸の青林に隱る。忽ち頭上にあたり梢を掃ふ音ありて落葉を認め、流れに送られ、舞ひ跳りて行きぬ。

友は以前より汀に踞して動かず、何の詩興湧くにや。即ち友が肩を打ちて出立を促す。歩々、犀川の奔流を賞してやまざりき。

ほど近き一森を過くれば溪聲微かなる所に村舍あり。犀川の里と云ふ。とある風流なる茶亭に憩ひて、熟柿と白湯とを求めて腹を肥し、渴を醫し、草鞋の紐を堅めて出ず。荷車三輛、馬之れを引き、馬子之れに乘りて曲面白く謠ふて過ぎぬ。

徑は稍々斜にして山は山と重なり、丘は丘と相連り、雜木多くして老杉の殊に幽森として茂り、遙かに霧のはく〳〵と動曳し、山容淡き所を指点すれば、蕭條たる山中の藁屋、霧中に歷落たるを認む。

水聲再び聞に、道は再び斜坂となる、喘ぎて稍々高き所に到れば、四望明かに、帶山悉く其頂巔に雲霧をとゞめ、瞰視すれば曲流せる白川の激して、踞石散亂し、或は水に陰れ、或は水を突く壯景、言語に絶す。仰げば日輪高く中天を過ぎて雲を止めず。

午を過ぐること二時、友と共に握飯を喰ひつゝ、景を賞して友と談ずるに、俄かに跫音あり、顧みれば、いと年長けたる老媼の、重き薪木を擔きて歩み來ぬ。老媼は立ちとゞまり、腰を伸して敲きしが、吾等に向ひ問ふに、何處の御仁にて何處へ行くなるかを以てす、吾等は何處ともあてなけれども只此わたりの山と水のあまりに面白ければと云ふに、老媼の妾は此先きの村に住めるものな

れば御同行仕らんと、老媼が實意に感じ、暫く山里の風光を賞し、かたはら近傍の勝地を尋ねて、いざ行かんと促せば、妾が後より可愛ゆき孫娘の來るなれば今しばし待ち玉へと、程なく少さき足音なして來れるは老媼が可愛ゆき娘なり。赤き扱帶の極めて目立ち、白き手拭打ち冠り、星眸の淸く愛らしく、いと羞恥を含める風情にて、頭を傾け點禮するさま鄙にめづらし、げに野に咲く百合乎、自然の薫りあり、こはこれ老媼のみならず確かに里人の愛すべき花ならむ、名はれ菊、雁なきて霜を落し、秋の日は長りて、萩花の露こぼれ、今年れ菊は十六なりと、老媼は獨り饒舌れり。友の輕舌快辨、すかさず之れに答へて其美貌を譽む、老媼はほく〳〵喜び、娘は赧み、予は含笑めり。

一行四人、前後緩步して徑を右に取り、溪聲耳を掠むること數町にして漸く微なり。老媼喘ぎ、娘言はず吾等談らず。徑路は兩山の裾に拓けて樹々の音、淋しく聞ゆ、百禽の聲あり。蒼空澄んで雲動かず、山容一望、秋氣滿ちて山影幽かなり。行くこと一里余りにして暮色迫り、山影愈々淡く、水聲又響きて、萬山に聲あり。路は一度盡きて新に左側に啓け、茂林の陰に滔々たる流あり、俄かに直下して盤石の上を斜に敲き、別れて二條となり再び合して流る。木橋あり、危險なること甚だし。徑は之れより坂となり稍々急なり、上り詰めたる所に徑窮し、更に流れを右に見て下る。何處にか塒に歸る鶏の聲あり。黃昏次第に迫り來ぬ。折りしも秋風颯と吹き扉きて滿山の樹木搖ぎ、溪聲又大なり。娘は老媼の薪木を分擔し、圓き腕を白くあらはに。

水聲たゆず秋山の薄暮に轟き、老媼の姿も、娘の愛らしき姿も、次第に淡く、四面蒼茫として煙に包まれし如く、山里の秋は刻一刻傾き逝きぬ。

步すること尙暫し、日は全く前山の山肩に落ちて、遙かに人煙悠々、髣髴として黐くを見る。老媼は已が村里の近きを言ひ、さて妾が茅屋に泊るべしと吾等一應、辭せしも、此わびしき山村には、逆旅のあるべくも非らざれば彼等の親切にうち任せ、母子が家を一夜の宿を定めぬ。

仰いで天の一方を望むれば山鳥の啼くあり、空には星まれに、半輪の月は天心に懸れり。山里は夢の如く寂として聲なく只山溪の音のみ愈々高し。漸く村舍に近ずけば破壁を漏るゝ燈火、一点、二点、各家は夕餐に急けり。童べ等の母を呼ぶ聲、乳呑子の聲、怒る聲、泣く聲、笑ふ聲、交々聞えて喧囂たり。されども予は何となく悲哀の念に充てり。

老媼が家は極めて怪しき茅屋にて、家には老媼と娘の

二人のみ、吾等は大なる爐にて暖をとりて澁茶をすゝり、娘はかひ〳〵しく夕餐の支度に急げり。

晩餐は犀川名物の鮭に、澤庵の御馳走、予は極めて空腹なりければ之等を賞味し、喰へば香味齒間に溢れ、友は五椀、予は四椀を傾けぬ。喫してのち爐邊に集り、友は例の雄辯くまなく奮はせ、氣焔萬丈、はてはた江戸の人間と金澤の人間を比較せんに、つく息の夏の雲の淸く痩せたるは東の人にて、春の霞の幽かしく溫かきは金澤の人、東京の人は眼尻ながく、つんとすれど今も人の意氣を愛し、金澤の人は、まんまる顏にて眼は優しく今も官員さんになるが理想なり、一は話して面白く凉しく、一は話して幽かしく溫かなりなど出放題に饒舌りまわすに、いつしか秋の長夜もいと更けぬらし。

寒風の氣は絞るが如く、水音幽かに聞ゆ。やゝありて老媼は夏愁なる顏をあげ、いと沈みたる聲にて言へらく、去年中、娘が兩親一時に倒れて他界の人となり、火の消えし如く淋しかりしが、思ひもよらぬ珍客にて、今宵はいと興ありと涙を流しての述懷に、潮の如く吾が胸に高まりつる哀れさ。さき程まで覇氣凌々、意氣天を衝かんばかりなる快活なる友が顏の、いつになく曇りたるを今に忘れず。

噫、さても浮世の風は此處を吹くらし。萬籟、一齊俱に音なき、いと神泌にとめる世、月は明澄なり、水は幽遠なり、然も森羅萬象、神韻にふれて蕭々颼々の音を寄せつ、春は花に戯れ、鳥と歌ひ、秋は月を抱いて、虫と語ひ、靈を嵐氣に求めつる淸淨たる女郎花の、況んや、榮達を知らず、名利を知らず、虛僞を欲せず、奢侈に沈淪せず。只愛すべきを愛し、戀すべきを戀し、慕ふべきを慕ひて一の邪念あるなく、俗塵の巷をいとうて一家團欒、ただ之れ樂しき自然に從ふ。つら〳〵觀ずれば歡樂も之れには過ぐまじ。吁々されど、此罪なき天眞の一家の永刼の春と思ひ暮せしも、うたてや。げに無常流轉の世の理には漏れざりき。止んぬるかな、昨日に變る今日は、虫の音も、風の聲も、水の響きも、花の色も、徒らに凋落を喞つ悲凄の曲に外ならじとは、あゝ哀しい哉秋の聲！ あゝ傷ましいかな此母子！ 悲愁の念、雲の如し。

瞑目すれば天に聲なく、地に聲なく、人に聲なし、只聞ゆるは犀川の遠瀨、鏘々として刄を砥くが如し。

最早話も盡きぬれば、老媼は明日の旅もあればとて床のべぬ。

吾れ立ちて雨戸を排せば、水聲洒々として來り、夢の如き霜林の梢頭には、山月を銜み、山紫水明、流れは空月を抱き、萬頃の山は月を迎へて山水相映ず、此時、過

雁一聲、肥秋の辭を謠ふて、山里の秋は傾き、空明澄んで秋空高く、旅情濃かにして、轉た、寂寥の感に堪ねざりき。戸を閉じて歸れば友は床にあり。吾も脫衣し床にすべりぬ。秋夜沈々として更け、茅屋尙あきらかに、水籟頻りに枕上にありて久しく夢を結ばず。

翌日、家鷄なきて曉夢を破る。友はすでに起きて床は脫殼、吾も褥を蹴つて手拭肩に、走りて流水に嗽ぎ、歸れば友は膳に向ひ我を待ち居たり。

四時、支度なれり。老媼も娘も別れを悲しむこと頻りなり、吾等も流石に別れの惜まれて、物の哀れさ胸に泌せり。あゝ人に懷ひあり、花に情あり。いつの世、いつの時にか亦は相見ん、一夜を乞ひし旅鳥、あすの日は他の杜に塒かる身とは知りつゝも——まして一たび相離れての後は世俗行路の人に外ならざるを、——あゝ始めて人の眞情に接して俗塵の汚血を洗ひ得たり。あゝ此山水に此母子！

黎明の光、微かなる頃、なつかしき茅屋の門に出で立ちぬ。娘は近邊まで送らばやとて草履はき來ぬ。

山里の黎明、萬山寂々、一樹戰かず、一禽聲なく、山影暗し。げに靜かなる山里なるかな、秋氣愈々深し。殘星の光り弱く、今朝も雲霧濛々として搖曳し、山影尙淡くして、水聲微かに、細草露に濡れ、樹々の綠葉しどしく睡より覺めざるが如く動かず、重げに露を乘せたり。秋も老たる今日此頃、人跡稀れなる寒村にありては冷氣殊に甚だしく身にしみて思はず慄ひぬ。吾等は乙女を顧みて、厚く親情を謝し、山氣いと寒むければ返るべきを云へり。されども乙女の動ずる色なく、つひ向ふの崖まで と含笑みぬ。

黎明の氣いまだ晴れやらず、仰いで曉の空を眺むれば、殘夜の星茫、淡くまたゝき、滿天の紫明濃かなり。風なきに梢露はら〳〵と落滴せるに驚き顧みれば、黑き小鳥の塒を出で、小さき羽音たて飛翔するありて霧裡遙かに姿を隱し、ぴよと啼きしが霧を破り、森に傳はり、谿に響きて早曉の寂寥を破りぬ。予は無量の感にうたれ、長く餘韻の消ゆるをさぐりぬ。小鳥の一聲に、百禽悉く塒を出で、淸らかなる音の、彼方の杜、此方の幽樹に朗々として響き、幽かに水聲と相和して美妙の音、萬頃の山に渡り、轉た、孤鶴に乘して、天界に翻舞するが如く徒らに旅情を偲ばしむ。

山陰のほとり、路は露をふくみて水氣あり、徑の俄かに曲廻すること甚だし、上れは下り降れは昇り、斜坂緩なる所、路は絕壁の上に盡き、瞰下すれば韃靼たる響きを聞きて流れを見ず、遙かに雲霧の中より巒峰の裾を繞りて白川の激あるを見るべし。あゝ絕景！世人犀川の淸

流を解くもの實に此奇景絶佳を語らざるべからず。見よ、山展けて人烟縷々、水舒びて水烟悠々、流れ怪石を嚙み、奔流踞石に激する所には水沫飛散し、崖堀に堰止められて小瀑布となり、二帶に分れて深谿を穿ち再び合して水勢さらに急射し、脚下を奔駛して雲霧の裡に響き微かなり。思へ寂々寥々たる荒野の裡に此韡韜たる響きあり、滿山蕭條として聲なき幽谿には鏘々たる音あるは英雄の戰場にありて三軍を一命の下に動令するが如きを、更に思へ崖根數丈の直上にありて此洒々たる響きを眼下に睥睨する吾あるを、吾は英雄の如く心は跳り思はず肩を聳て胸をはりぬ。倏忽、敵は吾が背後より攻擊し、急箭の吾が頭上を掠む、時こそあれ四面楚歌の沸くが如し、突然二箭の風を切りて飛ひ來る、こと急なり。吾は踵を巡らし背水の陣形を取れり。驚く可し敵は秀眉麗はしき女丈夫なり。いざ一戰いさぎよく鬪つて見んごと生擒せばやと思ふ刹那、玉の如き唄は少女の口より噴りぬ。氣は澄み唄は清し。友は崖頭に踞して動かず。予は娘に向ひ深く感謝し老媼の待つなるを解きて一刻も早く歸らんことを勸む。少女は名殘惜しげに吾等に對ひ、さらば妾は此所より歸るべければ恙なく着かれんことをと、更に小言にて、春は梅も咲き香ひ秋にまさりて景色面白ろければ再遊めさせ玉はれと頭を、かしげしが清き眸は露に輝き、愛らしき口は尙何をか語らんとせしが、惜別の情や迫りけん微かに吐息つきぬ。友は立ちて袖裏より幾千の金を出し、彼女に與へんとせしが、彼女堅く辭して受けず、老媼に與ふるなりとて無理に手に握らせぬ。少女は押戴き涙をさへ浮べぬ。

楓林の美觀、深谿の翠微、寒流の奔跳。賞すべく、乙女の清淨や稱讚すべきに非ずや。麗徹なる天然の山水は神韻にふれて少女を生めり、吁々乙女よ、汝は山水と關結せり、山水ありて汝あり故山をゆめ忘るなかれ。友の與へし金僅か、之れ都人士の多くは舌頭をかりて形式的に會釋し、却りて其少なきを見下げ、去りての後は呟く所なり。乙女よ常に斯くあれ、單衣を纏ふとも汝の胸裡は錦繡を飾るなり、花は散り、草は枯れて萬目寂寞なるとも怨むなかれ、なげく勿れ、汝は翠流に磨きて長へに山里の人たれ、故家をゆめ忘る勿れと心に銘し、彼女が健全と彼女の一家幸あれと祈り、わさらばと袖を分ちぬ。友は田舍に稀れなる美しき綺緻なりと譽め、予は田舍に珍らしき氣高き少女なりと賞しぬ。

斜坂急に下るあり、駛下すれば砂石踵に舞ひ、礫石後を追ふて飛ひ來る。友は早く駛せ去りて下より大聲に吾を呼ぶを聞く、されども我が足の痛みを覺ゑて快走する能はず、歩は歩を追ふて來り、踵は踵と鬪ひ、一歩にし

て急となり二歩にして迅となり、尚走ること數間にして急斜つき右廻して兩丘の踞に歩し、更に徑を左にとりて再び急坂に攀ず、動悸甚だしく喘ぎて泡をふき、頭を曲げて苦歩し、漸くにして壁頭に到れり。淙洒たる水聲新に耳に入り、霧は次第に晴れ、前山の山肩、朝朧を翳して四山の翠微明かに、山容又眺め新なり、遙か前山を指點すれば雲霧斜に頂巔に浮動し、俯して數丈の崖下を見れば、清流對山の腰を洗ひ、樹陰密なる所、翠色映じ、或は洒々として流れ緩なる所、翠碧を漂はし、韡韡として流れ急なる所、飛沫雪を降らし、踞石水に露はるゝ所、夜來の雨、花をうつに髣髴たり。散りて落花の如く、沸きて白雲の如し。

歩を早めて絶崖を快走すること凡三町にして山次第に迫り、山色新に、綠葉の中に紅葉あるあり、紅葉せる裡に翠嵐の清きあり。歩を移せば山容益々奇に、或は重疊せるあり、或は鳥居帽子の如きあり、兩山相接する所、濛乎として雲亂れ、斷崖城砦の如き所、奇松悉く躍り、其碎けて侵蝕せる所、細草の水滴を誘ふを見るべし。あゝ佳景なる哉、友は快哉を叫びて止まず。

眺望の佳景に心奮はれし吾等は、日輪の高きに驚き快走せり。徑路は川と離れ、新壁と斷崖の中間に拓けて奇景百出、其奇拔又言語に絶す。山骨あらはるゝ所、權木を見ずして危壁頭上を蔽ひ、清流洒々として濕す斷壁を通過すれば遠山肩端に襲ひ、水聲響かずして山籟を聞き、山景大に趣を添へ、蕭々たる秋風、虛空に咽ひて林間に呟く、眼を反して蒼空を仰げば、白雲流れて山頂に沒す。忽ち微かに泉聲の響きをきく、歩一歩、響き大ひに來り徑の右に折れ、山端を廻れば百雷の如き音あり、遙かに銀簾の垂下して水沫を飛ばせり、吾等は思はず膝を拍ちぬ。幅十尺に過ぎざるも直下する幾百尺なるを知らず、盤石の股をくぐりて噴り、白雨横さまに吹き來りて行人の衣袂を濕し、壯觀なること限りなし。

懷を飛噴の喚叫する所に分ちて歩し、楓巒を右に見て、徑路窮する所に到れば、響き微かに、四山寂として聲なきが如し、道は山腹に沿ふて走り、近く松林の端に拓けて、田圃の一帶を眺め、更に深谷大に落つ。脚下鏘々の音ありて砂磧山腰を縫ふ。小屋あり、白煙悠々。樹あり、翠綠蕭條、皆畫中の景なり。

友は綠葉を敲き、我は草を蹈んで歩す、風は樹間に絞りて百禽梢間に謠ふを聞けば、即ち仰いで吟じ。水聲湧きて翠綠の影之れに浮かべば、即ち俯して吟ぜり。俄かに山鳥の草を蹴りて愴冥に翔けさるありて疎松に聲あり。友の草鞋はき替ふるを待ちて行くこと數町、橋あり、崖より崖に懸り、急湍砂磧に挾まれて流れ、橋上の欄干に

凭りて窺へば、水底深く、寒水急射し、思はず戰慄せり。日は中天をすぎて白雲亂れ、碧水山嶺と談じて行人のあるをつぐるが如し。眺望又あらたに開展し、溪流に沿ふて眼を峯巒の連亘せる所に凝せば、山色遙かに連なり、翠松、紅楓、蒼茫として山容幽かなり。見よ眼のとどく限り、重山の巔上悉く白雲を載せるに非ずや、佳景なるかな、秋意極めて深し。

景は一瞬にして轉じて嵐氣搖曳し、二瞬にして斷雲の舞ふあり、三瞬にして景は益々佳望となる、或は煙の如く縷々として谷に下るあり、或は飄々として天に揚るあり、或は雪の如く動かざるあり。時に謠ふ聲すめり、風の斷續につれて細く低く、即ち人家の近きを知りて移歩す。山あり、凹みたる所、必ず水聲をきく、翠樹あり、梢間烟る所、必す楓紅を見る。耳は萬籟に馴れ目は尙奇景を求めて行く事數町、放眸宏豁、寒流の楓陰に咽ひで、凄冷悚然、漸く夕陽、巒肩に落ちて積雲潮紅し、四望蒼茫として淡し。友は空の潮紅するは起風の兆なりと、吾れ偏へに、さることの勿れかしと祈りぬ。

程なく村あり。瀨は白く之れを抱いて水烟漲る、二股の里と云ふ、即ち芽屋を叩きて一泊を乞ふ。家婦出でて快諾す。秋夜大に語り、大に笑ひ無聊を慰む。夜寒、身に徹すること甚だしければ褥につく、外は月あかく、寒嵐遠く鳴り、唧々たる虫聲斷續にしだきて燈下に音づれ、犀川の瀨は靜かに枕上に咲きて夢ならず。一夜彼の母子を偲び、漸く曉近き頃一睡をむさぼりぬ。

（十月七日舊稿）

○友の家にて

碧潮生

友の家に三日程厄介に相成居り候。海沿ひの一村、冬景色の稻株朽ちたる水田の果はコバルト色に連なる山脈、雪を戴きて日あたりよき清澄なる空氣の層を通して見められ申し候。

二階の一室、欄によれば脊戸は數歩の空地にして、色褪せて褐色に枝にしやがみつける菊枯れた鷄頭、葉落ち盡せる柳が云ひ譯ばかりに結びたる竹の垣根に、敗殘の身を寄せ居り候。垣一越して二畝ばかり土黑く耕された田に續きて、新しき草葺の屋根あり、廻りたる生垣の際より高き柿の梢には、紅の珠の幾つが烏の餌にもならずして殘り居り候。

冬枯の草、風に靡く畦道を、踏て行けばやがて松原にて、數軒の漁家の間をくゞりて、拾幾歩、早、傾斜ゆるき砂濱に御座候。

友の誘ふまゝに、寒き朝を小川の邊つたいて、小學校

の宿直室にM氏を訪ひ候。霜になやめる菜の畑、水蒸氣登る水邊、ピョンピョンと汀を渉る鶺鴒、クザクザと音する霜柱蹈み折りて、やがて宿直室裏の人と相成候。今日は日曜にて學童も見にず、火鉢には炭火盛におこれども、何となく寒さと淋しさとが感ぜられ候。午後は今日の好天氣を、風なき砂丘の陰に送るべく約して辞し申し候。

午後、三人して海岸人氣少なき砂の上をふみて歩をうつし候。右手に突出する松茂き岬、その盡くる所水平線を見遙かし、對岸の遠き藍色の山々麗はしく、M氏スケッチヅックに色鉛筆もて収め申し候。遠慮なき友人「景色が泣いて居る」との悪まれ口、M氏も負けぬ、減らず口たゝきて、骨組逞しき男二人して、船底をたで居る所へ行き、砂上腰れろして一服いたし候。

翌日の午後、又三人にて今度は寒さこらにて小舟に帆張り、セーリングとしやれこみ申し候。今日は風稍強く、心もちよく水面を辷るに興加はり、大膽にも沖合へ少し乗り出し、扨て歸る段になりて海一面白浪の巷と變じ、上手廻しも出來ず根が經驗なき面々、大さわぎしてドウやらやつと船首をめくらし、海岸へ矢を射る如く迄はよかりしが、碎くる磯浪に散々な目にあひ、船に水は流れ入る帆は飜る頭から足先迄ズブ濡れにて、「助けてくれ!!!」と三つの口等しく叫びしは飛んだ苦しい洒落に御座候。此際、M氏新調のハンチングキッヤブ、可惜浪にさらはれ申し候。之はM氏にも友にも極々の秘密にて候らへ共、外ならぬ君への御話草に迄。但しM氏達へは御見舞狀は御無用に御座候。別に目あたらしき事も之なく候まゝ、こゝらにて切り上げ申すべく候。拜具

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

通信

○歸國畧記

（松原三郎氏 Freiburg 發八田氏宛）

松原三郎君一月三日金澤ニ歸着セラレ本月初ヨリ母校ニ教鞭ヲ執ラレツヽアリ然レドモ此通信タル甚タ興味深ク且ツ吾人ヲ資益スルヿ大ニシテ之ヲ割愛スルニ忍ビズ故ニ特ニ此處ニ掲載ス　（編者識）

所謂天高く馬肥ゆると云ふ秋氣に入り候處足下の御起居別に御異りも無之候や此好時氣に際し一層の御自愛ありて益々御健康なられんこと奉伺候、承れば小川先生には御輕快後再ひ御重症に御座候由其後の御經過如何に候や、天道是耶非耶を呼んで足下に呈したること一再にし

て止らず而して今又此悲報に接す實に繰り返へすべき言葉も無之候、余は只だ此好時候が先生の病勢をして速かに輕快し一日も早く先生が快癒せられたりとの吉報に接せんことを遙かの異郷にありて祈居り候

歸國旅程の豫定は既に足下に呈せり、今再び記する贅を避け只今實驗せる大要を申上げ以て足下の高覽に供す

豫定の如く十月十二日紐育を出帆仕候五ヶ年の歳月住み馴れし土地を離れしことに候へば恰も故郷に別れるが如き心地せられ候、紐育にては澤山の汽船會社が各々數個の阜頭を有し何れも紐育の街道より直ちに乘船すべき裝置となり實に便利なるものに御座候、横濱にて乘船するのとは大差有之候、小生の乘りたる船は赤星會社 Redstar Line の Finland 號と稱し大平洋上にては最小の滊船に候、夫れでも一万三千噸ありて日本郵船會社の船の二倍位はあり大なるものは四万噸近くあり一時間に約二十三四哩を走り頗る素晴らしきものに御座候、小生の船にても一二等室が四百斗りありて巧に排置せられ幸にして小生は早く申込み置きたるため甚た宜しき船室を獨占仕候紐育の滊船會社にては各滊船の精密なる圖ありて船室の模樣を明にし申込時に取調の上船室を取定め可申候、然るに余は仝時に倫敦の郵船會社の讃岐丸に申込置きたるに只だ船室を取り置きたりとの返事ありたるのみにて仝船のドンナ工合の室を取り置きたるや更に相分らず恰かも内部の間取等を見ずして借家の條約をなしたるが如く誠に不得要領の話に御座候、又大平洋の滊船の食堂は一二等共に中央にして底に近く最も動搖の少なき所を撰ぶを常とするも日本郵船會社の船の二等食堂は大低船尾にして而かも上方の甲板に設け船中最も動搖の烈しき所に有之候、加之小生が米國に渡りたる時に乘りたる伊豫丸の病室なるものは最も船尾にありて最上甲板に位し船中成るべく丈け動搖の烈しき所にありたることを實見仕候、其爲め小生は渡米時小生の寢室内に居れば異狀かりしも食堂へ行けば直ちに眩暈を催し食事に堪へざること數日に及び申候、余は日本郵船會社の造船設計に關係する人々が果して常識ありや否やを疑ひ申候

此後西洋へ遊學する人々益々多く相成るべく候故出發前に可成船室及食堂等の工合を取調べ日本郵船會社の船の如き惡設計の船には可成乘らざる樣にせられたきものと存候、殊に船に弱くして二等船客たらんとする人々は深く注意せられたきものと深く感じ申候、小生も注意淺く既に倫敦の郵船會社へ申込濟となりたるため致方なく郵船會社の船にて歸へることゝ相成申候

歐洲及米國間は五日間乃至十日間を要し一等二百圓以上二等百圓以上に御座候、勿論此一等或は二等にても其中

に船室のあり所によりて幾多の差異有之候へ共當地の二等室及食堂等の工合は日本郵船會社の一等と畧ぼ全一に御座候、又其散歩區域も日本船の如く後甲板に限るが如き乱暴なるものにては無之日本船の二等客は當地の船の三等客と畧ぼ全一の待遇を受け居候、日本行きの外國船は如何に候や小生は知り申さず候

船中は別に變はりたることもなく一日急に波が荒れたるときに輕度の船暈を感じたれども其他は元來船弱き小生も無事にして航海仕候、小生の乘船はベルヂユーム國アントウエルプ市着のこと故乘客の多數は獨語或は佛語を話す者に候へ共勿論其外に英語は大低悉く話し可申候、船中生活は何れも全樣なるものにて、朝には故郷の夢さめて甲板に立てば水天一界清又新、凉風衣を振ひつゝ東天高く燃ゆ立ちて白雲たなびき海原は遠くして水は綠若く其間を水鳥が飛んで点又点と映じ銀波旭に碎け何となく血氣に走る青年のもゆる前途の希望を現出しつゝある樣に思はれ候、又晴天の晝に鐵艦甲上に佇めば水天相連る乾坤の眼界一眺吾に有し天地は我か我は天地か、見ずや行く手に日は輝りて後ろに黑煙濛々中天を縫ひ怒濤を蹴て進みゆく男子の壯心誰か知ると云ふが如き意氣にもなり、夕刻に至れば海原うすく暮れ初めてくれない流かす西天に紫匂ふ雲間より今し立ちたる黃金の靜かにたなびく虹の橋渡りて落つる夕景群がる星に送られて永劫の水に映れるは古今の歴史を彩どれる英雄の名殘に似たるかなと云ふ樣な景色もあり、夜に入れば暗黑四方をとぢ込めて空より墜つる風に和しよせては返へす仇波の音のみさへて只一人宇宙の靈の偉大を歌ひつゝ月なき銀河を見上ぐれば奇しき魔力に襲はれて今し流るゝ星一つ西天遠く亞米利加の雲のあちらに落ちて行くが如き悽景も有之候、或は日中霧深く立ち込め晝尙ほ半ばに日は落ちて雲か煙か果た陸か行く方も知らず越し方も黑き霧に包まれてきりよりきりに見ゆかくれ空つく波の高き音は愉快にもあり又た慘憺にも有之候

九月二十一日初めて陸を見たり之れ愛蘭土の南端にして夫れより英國の南端の Dover 港に進み此處にて船客の一部は上陸し午后四時アントウエルプ市を去る二三十哩の所に行きて船は止まりたり、翌二十二日朝八時滿潮に乘じ再び進行を起したるに何ぞ圖らん後方に日本船土佐丸が隨ひて來らんとは、此の異郷にありて故郷の船に會したる時の愉快は蓋し足下の想像せらるゝよりも大なるものに御座候、十一時にアントウエルプに着き十一時半上陸仕候、稅關檢査は誠に單簡なるものにして檢査吏に少し金を握らせばトランク等を總て手もつけずして檢査濟の記號を書き誠に乱暴か或は寛大なるものに御座候

アントウエルプ市はベルヂユーム國にありて公然の佛語の外に Flemisch 語なるものあり、大に英獨語に近きものにして大低の掲示等は想像することを得べきものなり、一書店の看板に書ける例を以て足下に示さん

School boeken voor alle Schoolen

當地にては英語は思ひし程に通用せず獨乙語の方が却て英語よりも通用す、勿論大なる旅館及商店にては英語が通用し所によりては商先きに特に Englishspoken とか或は Man spricht Deutsch と記せるを見る、當地にて一寸目立つものは巡査の帽子が古代の武士めきたるものにて劍を帶べるは米國より來れる余には變に見ゑたり、又犬には悉くクツワを口に入れる法例と見ゑたり、種々用事ありたる爲め當地には六日間止りたり

九月二十八日午後四時半アントウエルプ市を發して五時ブルツセル市 Brussel に着すベルヂユーム國の首府にして美麗なる町なり、翌二十九日午前日本公使館を訪問し夫より内務省に行きて精神病に關する統計書類を得んとす、余が地位や公使からの紹介の有無を尋ね手續中々に面倒なり余は今更に深く米國の自由を羨望せずんばあらず、米國にては万事單簡にして或は病院監獄を參觀し或は諸官廳より統計書類を得んとするや常に悅んで其意を容れ亦敢て余の名を問ふものもなし、然るに余は今歐洲大陸に來りて規則づめの煩に逢ひ而かも不完全極まる統計書を得たり、夫れより當市第一なりと云ふ普通病院 St.Piere ヨ行く入院患者五六百名ある大病院なれども古くして研究も盛ならず案内も親切ならず、夫より當地の醫學校に行く規模小なり、去て精神病クリニックのありと云ふ普通病院 St. Jean に行く相變らず公使より紹介ありや否や等の煩問を受け案内大に疎なり、其精神病部なるものを見るに一棟ありて目下女患者三名男患者六名あり病室の不完全なること言語に絶ゑ余は斯る前世紀の遺物が此歐洲大陸の一首府に今尚ほ公然使用せられつゝあるに驚きたり、統計書類を得んとせるも前病院と全樣に別に何もなしと云ふ、余は當市にて尚ほ監獄署を一見したき豫定なりしも手續の煩と設備の不完全とを豫想し斷念して夜巴里に出發したり

九月二十九日夜十一時巴里に到着せり、米國にては無用なる公使館の紹介狀が歐洲にては大に利き目あることを知りたれば、翌三十日早朝大使館に行く館員未だ來らずして偶然栗本庸勝氏と共に待つこと久しくして晝十一時半を過ぎ漸く館員の來るを見たり亦呑氣なる役所にあらずや、余は先きにアントウエルプに着くや即日尋ね尋ねて漸く領事館のありと云ふ町に行きしに先日移轉したりと云ひ翌日午後二時頃其移轉先きに行きたるに已に閉戸

して執務時間は午前十一時より一時迄と記せるを見る、一日十二時間の書に僅に三時間の執務とは亦勿体なき役所にあらずや、其翌日十一時半頃に再び行きたるに領事未だ來らず半時間以上も待たされたり、足下よ斯る風習をして日本内地にあらしめば或は所謂御役所風として別にあやしむ所あらざらん、然れども呑氣を歐洲に見んとは余の毫も期せざりし所なり、殊に時是金といふ米國に訓れたる小生には實に驚くの外なかりしなり、余屢紐育に於ける日本正金銀行支店に朝行けるに執務時間九時よりと云ふことになり居れども朝九時に來るものは二三の西洋雇人のみにして日本人雇員の來るは多くは十時近くかることを度々實驗し以後全正金銀行へは朝に行くことを止めたり、斯くの如くにして多數の雇員を用ひ而して事務のあがらざる理の當然なり、足下屢々聞かるゝならん日本程に澤山の雇員を用ひて而して事業の擧らざる役所及病院は世界中に又とあらざるなり、此等は吾人の深く考慮すべき問題に候はずや、小生の居りし研究所を以て足下に實例を呈せんとす、小生の居りし研究所には六七人の助手、標本造の男女六人、寫眞師一人、タイプライタ女二人、掃除女(半日働キ)一人の外に事務員僅かに一人、小使僅かに一人あるのみ、足下之を信せんとするも或は難からん、然れども之は事實に御座候、足下よ日本の役所には小使室なるものありて小使は多くアグラをかいて喫煙しつゝあり、然れども西洋の役所には別に小使室なるものなし、之れ小使等悉く皆な一日中働くべきものにして安座すべきものに非ず又何ぞ小使室を要せんや余は日本の公使館なるものを見て深く感ずる所あり斯の如くして事務を取り扱ひ得べくんば現在の半數の雇員にて充分ならんことを感せり、此十月三十日午後は栗本氏と共に市内を散歩し例の凱旋門エーフエル塔にも上り地上を往來する人間が蟻の如くなるを見て情けなく思はれたり

十月一日巴里醫學校に行き學校一覽を要求す、米國なれば無代進呈と云ふことなれども此處にては一フランの賣品なりき、時尚ほ暑暇にして校内を案内するものなし、止むを得ずパストール研究所に行きたり全所は黴菌學的研究所、化學的研究所及病院の三部より成り諸事大に完全し歐洲上陸后初めて學問的らしき研究所を見たり、足下も既に御承知の南亞弗利加のトリユバノゾーマの研究も盛にして南亞弗利加より來れる猫等もあり、化學部にはメチユニコッフ氏が黴菌を移植しつゝある猿二十頭斗りを見たり、此處も案内の不親切なるが爲め充分に知ることを得ずして歸へりたり、病室には實扶的里等の患者を收容し小規模のものなり、此研究所にて最も感じたる

ものはパストールの屍室に候三間四方位の石室にして中央にパストールの棺あり正面に佛壇の如きものあり左側にパストールの屍顔より取りたる模型あり、天井及側壁には試驗用に供する動物例ば兎羊犬猫等を描き内部には澤山の大理石を用ひ窓等なく只電光を点じて案内せられ親しく此偉人の棺に接したる時には何とも云はれざる一種崇高の念に打たれ自ら頭の垂るゝを禁ぜざりき、尙此近傍の町をパストール町と云ひ街頭に宏大なるパストールの碑あり

十月二日公使館よりの紹介狀を持ちて Petie 病院に行き例の有名なる Babinski 氏に紹介せられたり、初め病院の事務長に逢ひ小使をして余を Babinski の病室に導さたり、此事務長及小使は共にババンスキと發音せるも仝氏に親炙しつゝある助手はバビンスキーと發音致し居り后者が正當に御座候、成程佛語的に發音せばババンスキなれども仝氏は魯國人にしてバビンスキと發音するを正當とす、日本にても或人は之をババンスキと發音致し居り殊に當地の仝病院内の事務長及小使は佛人なる故ババンスキーと發音致し居候故御參考の爲め申述置候、斯の如き發音の間違は澤山あり、殊に英人及米人醫の姓名を獨乙及日本には獨乙語的に間違て發音するもの多し例ば染色法にて有名なるヴアンギーゾン Van Gieson（紐育の人）をフワンギーソンと發音し、麻痺狂等に來る瞳孔の光線反應强直のアルガイル。ロ－バートソン氏反應 Argyll-Robertson' sche Reaktion（英人）をアルギールロバルトソン氏反應と云ふが如し、此バビンスキー氏病室にては病理的研究は盛ならざれども臨床的研究には大に意を用ひ半身運動麻痺小腦疾患の運動失調等に一寸面白き新症狀を發見致し居り候へども余り長く相成可申候に付き畧し申候、仝所にては顏面神經麻痺等に割合に强き平流電氣を用ひて良効ありと云ひ脊椎骨結核等にX線を用いて又良効ありと云ひ頻りに賞用致し居候、午后精神病學歴史上有名なる Salpêtrier 病院に行き申候、當病院にては十八世紀に精神病醫 Pinel 氏が初めて狂者より鏈鎖を除去して普通の他の病氣の患者の如く治療せんことを企てたる有名なる病院にして、Pinel 氏が患者より鏈鎖を除去せしめつゝある圖は繪畫としても有名なるものにして世界到る處精神病院に備へ付けざるはなく其原圖を實見仕候、又有名なる Charcot 氏も此病院にて研究し今尙ほシャルコー氏圖書室或はシャルコー氏クリニックと命名せる特別の室あり、又 Pinel 或は Voisin 病室と命名せる病室も有之候、此病院は世人の豫想に反し目下は甚だ少數の精神病患者を収容し其大多數は純粹の神經病患者或は老朦患者に御座候、此處には佛國にて有名なる神經病

學者 Dejerine 氏もあり其病理研究室も頗る盛なる樣に見受けられたり、此病院にて一寸異りたることは癲癇患者の頭に革製の輪をはめ患者が癲癇發作によりて卒倒するとも頭骨を直接打傷せざる樣に注意したるものなり、此の病院より急ぎ地下鐵道によりて巴里の精神病院 St. Anne に趣き候、時將さに午後五時近くに至らんとし紹介せられたる醫士も居らず他の醫士も相變らず親切に案内するを好まず只だ僅に病室の一部分を見たるのみに御座候、病理研究室は鍵なしとかのことにて實見することを得ざりき、此處には純粹の精神病院の外に巴里醫科大學の精神病院學校教室（教授 Joffroy 氏）も有之候へども別に大したものには無之樣に見受けられ候、何分充分に實見すべき機會なかりしに付き不得要領に終り申候

此他當地には普通病院 Hotel Dien ありて最新式の病院に御座候、此病院内に精神病科あり Brossand 及び Ballet 氏之に從事し巴里精神病者は大低一度此病院へ收容し夫より精神病者なることを確定の上前の St. Annel 病院に收容し此精神病院にて特別の精神病院的治療を要せずと認むれば他の普通病院の精神病部例は Salpetrier 病院等へ再び轉送致し居り候、此等の病院は何れも古き建築にして其設備も不完全なるものに御座候

其他 Bicêtre 及 St. Antonie の二病院をも見物すべき豫定なりしも其時日もなく殊に佛國の病院にては獨語或は英語を話す醫士誠に尠なく多くは佛語のみにて小生には參觀するとも効能も尠なき故病院見物は此にて止め、後ち三日間は見物馬車にて巴里市の内外を見物仕候、實に巴里は歴史的及美術的の建築繪畫彫刻等に富み全三日間馬車にて乘り廻はし漸く其一斑を伺ふを得る程に御座候、市街の美なること人馬の雜沓することの世界に冠たることは足下の既に御承知の通りに御座候

十月五日夜十時十五分巴里を出發し翌六日獨乙に入り朝九時 Strassburg に着き精神病學教室を參觀す教授は Wolenberg 氏にして患者百五十名斗あり別に可もなく不可もなし、發揚せる患者に用ゆる持長温浴は頗る完全せり、病理的研究は完全ならず、此教室にて隅然一助手に會せり、仝氏は昨夏紐育に來りて會ひ日本へも行きたる緣により甚だ親切に案内せられたり、夫より病理解剖學教授（Prof. Chiari）に行きけるに日本人三名あるを見たり、此教室の後ろに有名なる Schmiedeberg の藥物學教室あり

仝六日午後四時頃 Strassburg を發車して六時四十分 Freiberg に着し、翌七日早朝精神學教室（Prof. Hoche, Dr. Spielmeyer）を參觀す教授未だ來らずして一上級助手の病室患者を診察するに附隨せり、勿論大學のこと故

診斷及所置等は最新の方法を用ひ持長温浴十二箇も盛に賞用せられつゝあり、病理的研究（一年の解剖數は二十乃至三十例）は Strassburg 大學よりは盛なれども尚未だ充分ならざるものゝ如し、臨床的病床日誌の記載は「ストラスブルグ」大學と全じく隨分不完全なるものなり、此教室も全じく古き建築にして尚ほ Zelle 檻室を有し犯罪せる精神病者を收容しつゝあるを見たり、其一例は癲癇の朦朧狀態中に其妻を殺害せるものなりと云ふ、此教室にて小生は初めて Cretin を實驗せり此精神病は當アルプス山脈附近に特有のものにして日本及米國には無之候

○田上清貞君通信

（井ユルツブルヒ發十全會宛）

十月十八日の只今本國より黑枠入りの案内狀を落手せり急ぎ見れば學識卓越胸懷寬厚にして予等の師父と仰ぎ敬せし小川先生御永眠の報知なり、予は斯く万里の異鄉にあると故先生の御病氣なりしとは露知らず、悲報を得て愕然として驚き悲哀の感に堪へず、しばし暗涙に咽び、胸中無限の哀悼を感せり、此悲しき報知と同時に予は留守宅の愛兒が重き病床にあるとの報を得て、悲哀が一層胸に充ちたる際なれば先生の御永眠が惆恨悲嘆を感せしむると殊に甚しかりき、如何に學問の爲めとは言へ千万里隔つる予は敬慕せる先生の御永眠されたるとや愛兒の淋しき留守を守りある際に病臥せるなど聞きては九腸寸斷の思ひあるなり

嗚呼如何に悲むとも實に詮なきとなれば先生生前の御恩誼に聊かなりとも酬ひん爲め又英靈を慰めん爲めの企ては先生に對して盡すべき道なり、先生の英名は母校の赫々たる歷史と共に永久不滅なり謹みて哀悼の意を表す

却說予の着獨以來夢の間に早や半歲を過せり元來筆不精の某其間何等の通信をもなさず失禮せり本年三月より九月迄繁華なる大都會民顯市に在り十月初旬當ウルツブルグ大學に轉せり今は此の靜閑なる小都市にて樂しき消光をなしつゝあり

民顯大學の近狀に就ては曩きに飯森氏及び橋本氏の通信に依て各位は既に充分御存知のと故に予の此に新に述ぶる要なからんも顏相の異なる如く吾人の觀察点も亦人に依り多少異なるとあらんと思ひ頃日小閑を得て二三くだらぬと少しく述ぶるとなしたり

ウルツブルグ大學

ウルツブルグ市は獨逸の南方に位する聯邦の一所謂バイエルン領内にて民顯市を去る北方七十里に位し人口八万、四方山を以て圍まれ氣候温和なる小都市なり、此地

古昔より大學設備あり、民顯大學及びエルランゲン大學と共にバイエルン領内の三大學たり更に獨逸全國より言へば二十一ケの大學ありて各大學競ふて學科の蘊奥を極む亦盛なりと云ふべし

當大學醫科教師はプロフエソル貳拾七名、プリフアドツエント十三名あり、其中有名なる人々は内科にはロエベ氏小兒科マッテルシトック氏、産婦人科ホフマイエル氏、解剖學ストエル氏、局解シュルツエ氏、衛生學レーマン氏、精神科リーゲル氏、眼科ヘッス氏、生理學フレー氏、病理學ボルスト氏、藥物學フアウスト氏、外科學エンデルレン氏、リーヂンゲル氏、及びロゼンベルゲル氏、耳科學キルヒテル氏、皮膚梅毒科サイフエルト氏、醫學史ヘルフライヒ氏、理學的療法ガイゲル氏、法醫學ストウンプ氏、組織學ソボタ氏、醫化學ギユルベル氏、齒科ミツヘル氏等とす

ウルツブルグ大學と我留學生

我赤十字社病院長橋本綱常博士三十余年以前此地に留學せられたるを以て嚆矢とす、其後河本、長與、金杉等の諸博士あり數年前千葉の井上善次郎博士あり今春二月迄先輩敷波重次郎氏當解剖學教室にて熱心研究せり豐富なるアルバイトを完成されストエル教授の賞讃高かりしとのと近時當地に留學せるものは十名許にして民顯大學の四五十人の多數なると大に異なれり之れを以て當地在留同胞は殊に親密にして各々學事を語り或はシタエンベルグに登り月を賞し或は數人相會し日本食會を圍むなど恰も家族的の感あり

シーボルト先生

日本醫學發達史を繙くものは蘭醫シーボルト先生の我國醫學に貢献せるの如何に大なりしかを知らん先生は蘭人にあらずして獨逸人なり、ウルツブルク市オット街の大學本部と高等法院との相對せる一大廣場に容貌偉大なる半身銅像あり之れなん我國醫學の恩人我が眼科學界より言へば我國に稱して散瞳藥の傳へし碩學シボールト先生の紀念碑なり實に先生は此地に生れ此地に永眠せるの人なりされば吾等留學生は眞の當り其銅像を拜しては尊敬の念禁する能はず

留學地撰定に付

民顯大學に一學期在學し眼科研究室の一員たりし予は今十月一日ウルツブルク大學に轉せり之れ予は當大學に調節械及び屈折械を以て有名なる大家ヘッス先生あるを以て親しく聲咳に接し示導を仰がん爲めなるも吾人の同窓にして今后留學せン人多々あるならん留學地撰定に付一言するも無益のことであるまいと思ふ

獨逸諸大學には各科專攻の大家あり親しく教授の任に當

れるを以て何地の大學に留學するも不可なしとは言へ概して伯林民顯の如き大都會の大學教授は俗務多忙なる爲め眞に研究の余暇少なく從つて留學生示導も親切なる能はず此点に於ては寧ろ小都市の大學を以て優れるの感あり例令は東京大學と京都大學と比較せしが各々其特徴あり各教授の學事研究盛なりとは云へ東京は京都に比して周圍の事情獨り研究室の人たるを許さず大家も俗務に追はれ俗界の人たる事實諸君も知れる所なり之れ一つは土地其者と大なる關係あるを思ふべし

大都會の大學は學生甚だ多く之れが爲め師弟間充分親誼の得ると難し小都會の大學は此点に於て優る予の當大學に轉せしより日尚淺く約貳週日なるもヘッス先生の温厚なる予は先生の教授室にて研究材料に付親しく面談すると五回其邸宅を訪ふと一回診察室にありて日々其温言に接す閑あれば先生より進んて Wie gehts Ihnen ? Mein Kolleg ! ドーデす僅の同僚よと時は親接なる言辭に接す斯るとは民顯等大都會の大都會の大學ょ於ては少なし從つて師弟の間疎にして研究者の不快此の上もなし

海外にありては同胞たる吾等日本人の相親しむは當然の事なりと雖とも民顯の如き日本留學生多き地は玉石混交なり從つて研學の上にも良否あり單に試驗を受くるのみならば玉石混交の地亦可ならんやも知れず靜かに已が專攻學科を研究せんには寧ろ日本留學生僅少の大學を以て可とす

將來留學せんとする人は日本にありて留學地の決定するも隔靴搔痒感ありて何等の効もなく先つ伯林若しくは民顯の如き大都會に二三ヶ月滯在し心神を爽快にし徐ろに留學地を決定するを以て良策とすたとへ知友なきも同胞は親切に意見を述べ紹介等の勞を取り呉るゝなり實際吾人の海外にあるや兄弟のそれの如く温なり

以上の卑見は正鵠を得たるや否やは自からも明言し能はざる所なり

同窓留學生

羽根田信次君　九月十三日民顯安着せられ當時予と同町に下宿せられしを以て同君とは親しく談笑し母校最近の事情など聞きたり同君は予の意見を參考され當分民顯にあり靜養徐に活動せらるゝ筈なり君の沈着なる其成功や必せり

橋本監次郎君　八月既に歸朝せらる君の民顯大學にあるやバウエル教授につき其病室を擔當して熱心研究し或は醫科學教室の人となり又氣候療法及び理學的療法を研究したるなど多數留學生中其名を全ふされたり

松原三郎君　九月中旬獨逸に入り十月六日瑞西に至り下平先生を訪ふて快談ありしとのとにて着獨の通知ありし

も未だ面會の期を得ず君の豐富なる學識を以て獨墺佛英等諸大學巡視の上日本に向つて出立せらるゝ筈なり

由來專門學校出身者中頭腦明快學術に熱心なる人なきにあらず斯る優秀の人をして卒業后其研究實績に徵し敎授となすの進路を與へば大學出身者に劣るとなしと信ず之れにより校名擧がり校風愈々改善進步し學生も亦益々學を勵むに至らん今や學友松原君精神病科敎授に決定せりと君の爲めに其天地の小なるやの感あれども予は母校の進步發展上眞に大慶に堪へず

精神病科の新設せらるゝに至りしを祝すると共に豫算の都合上にもよれど小兒科耳鼻咽喉科皮膚梅毒科醫化學衛生學等の新設分科するの時機速に來らんとを祈る學海は日々進步しつゝあるを以て陳腐なる學制は國家の恥辱なり

生沼曹六君　來る十一月當ウルツブルクに着生理敎室の人たる筈予は今此地に同窓の君を得るは喜悅に堪へず以上讀者に何等の裨益を與ふるとなからんも予の當地留學次第各敎授始め知己諸兄に非常に無音なりしを謝せんが爲め禿筆を馳らせぬ

終りに臨み我が十全會の益々隆盛ならんことを祈る

宿所　Worthstr. 3', Würzburg, Deutschland.

○松久祐馬君通信

在歐中の所感は諸敎授及諸先輩より既に本誌の簡來の花として每號連載せられ後輩の誘導奬勵とぶり宛あり次の一片稍書き私信の一切を裂きて君が幸意を衆に分たん哉

（前畧）尙ほ一つ我が母校に於て後輩者たる生は先輩者加藤（寬）學兄の爲めに特筆大書す可き一事を御報申上候そ、は新らしき（Deutscher）Doctor med. の加藤寬君の一大壯語を我が母校の名譽として不朽に長く傳へしめんと欲する婆心に外ならず候、生等は全獨逸の大學も亦。しかあらむと推し計らるれど殊に「プロイセン」の大學わけて當倶大學が如何に外國人に對して同情心を欠くのみならずドクトル授驗者に向て殘酷となりしを知るを得申候苟も万里の波濤を越へて當「グライッスワールド」大學に遊ばんとせらるゝ諸彥は須く次項御一讀の上御來倶あらむ事を望み申候。小生は此れに向つて一の誇大の語を弄するものに非ざるを誓ふものに御座候

今加藤君の壯語を語らんとする前に何故に「ドクトル」授驗者に殘酷となりしかを語らんと欲す。これその依て來りし原因を語るはことの順序として將に然る可きものなればなり、曰く原因に二あり一は遠因として二は近因と

してなり、前者は昨年大坂毎日新聞ドクトル云々の記事の伯林「ダーグプラット」此れを飜譯して其の紙上に載するや轉載又轉載その眼底に印したる陰影は殊に諸大學教授連の頭腦を深く刻みこれが爲めに二十余里距つる當地より最近程の「ロストック」大學授驗科目の增加を見るに至れり後者は近く本年二月に起れる出來とより來たれり。そは十數年獨乙に留學せし某氏の「ドクトル」試驗の結果の非常に不成績に起因し。その教授會議に上るや議論紛々某々新進教授は『かゝるものを及第せしむれば如何なるものも又「ドクトル」たるとを得將亦これあればこそ獨乙の「ドクトル」の價値を重ぜらるゝなれ然り余は「クリニック」にて三四の日本人を知れるも又之の如きものなしと』こゝに於てか老教授は『余は彼れの必ずしも善良なる醫師たるを見ず。然れども五六七年前（六七年間授驗者なかりし）授驗せし「ドクトル」の獨乙に在る長からざる丈彼れより言辭の劣りしに係らず、しかも關門は無事通過を得たり、ろれを通過せしめこれを通過せしめざるは均槓に於て失するものなりと』これを一方より觀察すれば何處にも免かれざる老者と若者との意志の衝突が事を他方面の材料にかり來りて權利の爭を存するものと見れば差支なきも。その材料となりしものこそ飛んだ迷惑千万に御座候。然し無事に某は通過せり。

然れとも教授間の紛々は一層劇烈を極めろの結果は遂に『外國人に對する試驗は獨逸人と異なるなく行ふ』と云ふとにて此の紛紜は落着致し候。

此の時に當りこの衝突が斯程の紛紜を重ね居るを知らず加藤學兄は生理學教室に（C_2H_5OH）とか何とかを日毎に玩びつゝ當時「デカン」たる生理學教授の「ブライブトロイ」に授驗せんかを以てせられ申候、時はこれ三月初旬諸講義はなし（講義は三月十五日迄ある規定であるのに「ナーステルフッリエン」が二月の半ば頃から頭を持ち上げ學生は出なくなる、仕方がないので休講となる何んのことはない、だらしのない學生から教授が「ストライキ」をやられて受持學科を休む樣なものと惡口を云へば云へるだろうが習慣と云ふ奴は妙なもので先生も又平氣のものだ）氣の早ひ教授連は旅行としやれる。學生はとうの昔故郷に團欒の樂を味ふて居る最早此の學期は天下太平と日毎應答談笑に日を送り居し折から一通の文信は鬚逞しき小使の手より加藤兄の許に入れり。こゝに於て加藤兄は行つて「デカン」に用務を問はれしに試驗期の非常に遲くなりしを謝し。直ちにこれを以て授驗し來れと「プロトコール」を渡され（授驗に際し各教授に授驗者なるを紹介し授驗後これに点數を附するものなり。又同封中に Promotion's Ordnung も入れありて「プロト

コール」の末に試驗官は必ず「プロモチオンス、チルドヌング」を讀みて後行ふ可しと記さる。同規則書には試驗は外國人に對しても又獨人と同じくす可し、全試驗は二週間に終る可き事。內科には小兒科及精神病を含む。外科は眼科を含むこれを以て人若し內科に授驗せは小兒科及精神病をも尋ぬ可しと云ふにあり。而して之の記事の下に赤鉛筆もて六七條を引けるなど注意周到を極む此れは小生等實見せるものなり）此の豫想外なる出來事は如何に加藤兄を驚かしめしよ。されどさてしもあらねば直ちに精神病教室に其の教授を訪ひて授驗日割の都合を問へり（大抵獨乙人にても一二日の間はあると云ふ）然るに又意外なる答は再び驚嘆に驚嘆を加へしめぬ、曰くこれから直ちに、やれとて二十分間の豫猶を以て一患者を當がわる。プラ獨乙を語る患者は如何に彼れを苦めしか、されど彼れはその「エピレプシー」なるを診斷せり。教授は來れり曰く患者は「マニア」にあらざるかと。然し意志硬き彼れは「エピレプシー」なるを信ずる由を云へば Ich freue mich, sehr schön! 何んぞそれ外國人を弄ぶの甚だきを見ずや。かくて癲癇に於ける尿の性分。糖尿病。糖の物理的化學的檢査。及試藥及その處方次に內科的疾病の肺炎と肋膜炎の區別。など、言へば問ひ、問へば答ふ。規則通り一時間油（脂）をしぼられ。その酷烈に再三の驚き今尙ほ眼に見る樣に候されど內科はお手のもの。かくて眼科外科產婦人科行へば立ちどころに試驗せられ「クリニッシュ」の方は三ヶ日間を以て終れり。第四日目に於て基礎醫學は初まれり。先づ病理教室にろの教授を訪ひ例の「プロトコール」を示し授驗せんとを以てせり。然るに「ドクトル」試驗と聞くや。上機嫌なりし教授は額上深く八字の皺壁を印しつゝ。Nein!!! と次に日本「プロトコール」一讀の後床上に彼れを抛ちつゝ。Nein!!! と次に日本人には語が出來ないから Absolut unmoglich!!! と大喝したので。さしも廣き「インスチット」の隅々に迄で響渡り隣室に働き居たる助手など頭を傾け耳欹つるに至りぬ。余又偶然に隣室に居合せ居たるとて此の如何に成り行くやらむと。とつたねつ。心を勞せしも暫時。ろは一つの杞憂に過ぎざりき忽然として沈默は室の一方より破れぬ。此躰小なれとも膽大なる加藤兄が口よりせるものこれなりき。曰く『ゲハイムラート』閣下!!! 余は授驗す可き權利を有す。何となれば授驗に向ふて正當の手續をなし且つ此れに對して莫大の金額を拂へり即ち六百五十マーク』と何んぞこれこの言の壯なるを聞かずや。流石の教授も此の突飛の答に含込れたるにや。然れば余は肝臟の「チルローゼ」を以てす、若しそれより明確に答にたらむには授驗の資格を有するものとして試驗せんと。

答は明確に即答を得。試驗の試驗は無事に通過し。數千と「ムゼーム」に保存せられたる標本は。再び彼れを苦しむる材料となりしも無事可良なる成績を以てこの難關を通過せり。かくて餘三科衛生、生理、解剖の學科の何れも手强きに係らず良好の結果を以て通過せられ渡歐來九ヶ月十三日を以て此の名譽ある「ドクトル」の「チーテル」は彼れを輝すに至りぬ。嗚呼寡聞なる生は權利を主張して授驗せし人を未だ我國に於て聞かず、況んや俗語を異にするこの外國に於てをや。留學生諸氏それ將たこの膽を有するもの又幾人かある。余はこの言が母校の名譽を高め。將た大には日本國を恥しめざりし一大壯語として。こゝにこの足曳の尾の長々しきを記すに至らしめ候。（中略）

以上の如き有樣なれば敎授と應答を要する用務を有する諸賢は少くとも一頁に五六字を引く位の讀書力と會話も外國人に接したる後に御來倶の方特策。否な絕對的必要と存候然らざれば檢驗の資格なしと頭よりはねつけらるゝは火を見るより明かに御座候。生着獨以來不知の人より受驗の程度及科目在獨中の費用などを御尋ねを受け、一々之れが御答の繁に苦しみ居り候加藤兄等も亦た然りと時々くどき居られ候。依て左に當地の物價及一二のことども記し置き候間十全會雜誌の余白も候はゞ御登載なし下さる可く候

當地の物價は伯林より安價の方なれとも然し大したる差もなかる可く存候

宿料大抵一學期定めにてそれを月割に月末に支拂候月宿料のみにて二十五—三十—四十マーク位。

此れが目下邦人の住居に御座候宿内の調度は佐々木敎授の通信？にありし樣に稱に覺ゑ候間これを略し候右調度一切は室に附屬せるものと知る可し。以上四十マールクになれば寢室の小さいの位は附て居ます而して大抵日本の二階ですこれが伯林等では得られないのです。

「ハイッンク」は月五六マーク位、晝飯これは「レストラン」に行て食す一食一マーク二十文夜食は獨乙人は大抵「シンケン」に「パン」位をバク附かせて居れど邦人は矢張「レストラン」に行て食して居る。晝食よりは割が高ひ。マー五六十文位から暖かいものが食はれる然し、こんな所では馬齡薯澤山の献立なので。七八十文乃至一マークモ出さねばなるまい。それに五月蠅のは酒手です。やるのは僅かであるが中に馬鹿にならない。殊に旅行でもしたら、あちらゑ行つても酒手こちらゑ行つても酒手の酒手酒手で鼻付合せする

要するに小生は國を出る時千五百圓を持て出た其の内三百十圓二等瀛船賃百五十圓が寄湊地及瀛船中の小遣及

「マルセーユ」から伯林二等百二十フラン荷物運賃九十フラン其の他晝飯雜費取雜二百五十フラン（百二十圓程）それから伯林五日次で當地に着す迄略百二十マーク（六十圓）合計六百四十圓差引八百幾圓と云ふものは昨年九月十八日より本年三月三十一日に至りて殘り少なくなつた僕は決して無駄費せぬに係らず（多少書籍は買ふた）平均月百二十圓は要した。これで旅行もしたり洋服も作らねばならぬと云ふと。どーしても百五十圓は要するとと信じます。（中略）

只當大學に於て小生の眼を驚かせたるは病理教室に於て「デモンストラーチオン」の節三間に余る「デーブル」の上に所狹き迄に堆く盆の上に盛れる標本の。一學期中絶にず異なれるものを見せられたると產婦人科教室に於ける「クリニック」に衆人環視のどん中央にあられもない所をむつ開かせの儘手術臺に載せてする置く一事に候のみならず四十五十の學生に情け容謝もなく連續に內診するとに御座候氣の弱い婦人否大抵の婦人は泣聲を上ぐるに至る可く候（後略）

佐々木、山碕、其他諸先生初め三木、林、齋藤諸兄へも宜しく願上候

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

會報

○叙任及辭令及其他

▲宮內省▼

叙從七位（十二月廿一日）　正八位　越野義三郎
叙從五位（二月十日）　正六位勳六等醫學博士　金子治郎
叙正七位（二月十日）　加藤靜雄
叙正六位（二月十日）　從六位　敷波重次郎
叙正六位（二月十日）　從六位醫學博士　高山正雄

▲內閣▼

任海軍少軍醫（十二月十五日）　萩野茂次郎

（各）陸軍二等軍醫從七位勳六等　吉井康次郎
陸軍二等軍醫從七位勳六等功五級　羽根田信次
陸軍二等軍醫從七位勳六等　小島顯治
（通）陸軍二等軍醫從七位勳六等　春田久十郎
陸軍二等軍醫從七位勳六等　瓜生尹重

任陸軍一等軍醫（十二月二十一日）

陸軍三等軍醫正八位　谷澤一郎
陸軍三等軍醫正八位　佐々木純一郎
陸軍三等軍醫正八位　鈴木實
陸軍三等軍醫正八位　羽根田公太郎
陸軍三等軍醫正八位　英軒二
陸軍三等軍醫正八位　山下振吾
陸軍三等軍醫正八位　水上俊三
陸軍三等軍醫正八位　松井源長

（通各）

任陸軍二等軍醫

京都帝國大學教授從五位醫學博士　鈴木文太郎

叙勳六等瑞寶章（十二月二十五日）

陸軍三等軍醫正從六位勳四等功四級　小原芳雄

任陸軍二等軍醫正（十二月二十三日）

陸軍一等軍醫　松浦啓三

賜一等給（二月十二日）

任金澤醫學專門學校教授　松原三郎

叙高等官七等（二月二十三日）

仙台醫學專門學校教授正六位　鬼頭英

任金澤醫學專門學校教授

叙高等官六等（二月二十八日）

▲文部省▼

仙台醫學專門學校教授　敷波重次郎

七級俸下賜（十一月三十日）

金澤醫學專門學校書記　山本兵三郎

職務勉勵ニ付其賞トシテ金七拾五圓給與（十二月四日）

金澤醫學專門學校助教授　松田菊治

職務勉勵ニ付其賞トシテ金參拾五圓給與（仝上）

金澤醫學專門學校書記　川島俊

職務勉勵ニ付其賞トシテ金參拾圓給與（仝上）

金澤醫學專門學校書記　笹井仁作

職務勉勵ニ付其賞トシテ金貳拾五圓給與（仝上）

元金澤醫學專門學校教授　湯目隆績

休職滿期ノ處在官七年以上ニ付年俸月額三ヶ月半分下賜（一月十四日）

金澤醫學專門學校教授　松原三郎

七級俸下賜（二月二十二日）

金澤醫學專門學校教授　鬼頭英

六級俸下賜（二月二十八日）

▲陸軍省▼

工兵第十一大隊附陸軍一等軍醫　松浦啓三

免本職騎兵第十三聯隊附被仰付（十二月十四日）

陸軍一等軍醫　瓜生尹重

補歩兵第三十五聯隊附（十二月二十一日）
陸軍一等軍醫　吉井康次郎

補歩兵第三十六聯隊附（仝上）
陸軍一等軍醫　春田久十郎

補歩兵第七聯隊附（仝上）
陸軍二等軍醫　佐々木純一郎

補歩兵第五十四聯隊附（仝上）
歩兵第十三聯隊附兼丸龜衛戍病院長
陸軍三等軍醫正　小原芳雄

免本職竝兼職補國府台衛戍病院長（十二月二十三日）
工兵第十八大隊附陸軍二等軍醫　水上俊三

免本職補台灣山砲兵第一中隊附（一月十四日）
名古屋陸軍地方幼年學校附兼同校教官
陸軍二等軍醫　森清吉

免本職竝兼職歩兵第三十三聯隊附陸軍一等軍醫職務心得被仰付（一月二十二日）
東京第二衛戍病院附陸軍三等藥劑官　小林吉五郎

免本職補佐世保衛戍病院附（二月九日）
陸軍三等藥劑官　六嘉孝光

熊本衛戍病院附被仰付（一月九日）
高崎衛戍病院附陸軍三等藥劑官　稲崎龍助

免本職補大村衛戍病院附（二月十二日）

▲海軍省▼

肥前軍醫長海軍々醫少監　鈴木寛之助

免本職補宗谷軍醫長（十一月二十日）
和泉軍醫長海軍大軍醫　大西瀬治

免本職補浪速軍醫長（仝上）
第七驅逐隊附海軍中軍醫　長井運男

免本職補舞鶴水雷團附（仝上）
海軍少軍醫　萩野茂次郎

海軍軍醫學校練習學生被仰付（十二月十五日）
浪速軍醫長海軍大軍醫　大西瀬治

兼補高千穗軍醫長（十二月二十二日）
舞鶴海兵團附海軍少軍醫　小野醇吉

免本職補舞鶴海軍病院附（一月十一日）

▲石川縣▼

石川縣金澤病院醫員　藤井一雄

依願職務ヲ免ス（十一月二十一日）
石川縣金澤病院醫員　臼井丈吉

依願職務ヲ免ス（十月三十一日）
金澤醫學專門學校助教授　林常雄

石川縣金澤病院調劑員ヲ囑託ス（一月九日）

月手當金五圓給與
石川縣育成院醫ヲ囑託ス　（一月十八日）　小田善壽
年手當參拾六圓給與
石川縣金澤病院劑調員ヲ命ス　（二月三日）　關戸辰治郎
月俸金拾五圓給與
依願職務ヲ免ス　（二月九日）　金澤病院員　渡邊復介
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス　（二月十五日）　樋口平次
月俸金貳拾圓給與
金澤病院長醫學博士　高安右人
御用有之東京府ヘ出張ヲ命ス　（二月二十三日）

▲本校▼

藥學科副手ヲ囑託ス　（十一月二十六日）　加藤健之助
眼科學副手ヲ囑託ス　（十一月二十八日）　大住惠
病理學副手ヲ囑託ス　（十二月四日）　小田善壽
金澤醫學專門學校產科學婦人科學副手囑託　佐竹清吉
依願囑託ヲ解ク　（十二月四日）
金澤醫學專門學校雇　安達友直
自今月俸金拾五圓給與　（十二月十六日）
金澤醫學專門學校雇　崎田誠四郎
職務勉勵ニ付慰勞トシテ金參拾圓給與　（十二月十六日）
金澤醫學專門學校雇　安達友直
職務勉勵ニ付慰勞トシテ金貳拾圓給與　（仝　上）
金澤醫學專門學校雇　押野與吉
職務勉勵ニ付慰勞トシテ金拾五圓給與　（仝　上）
金澤醫學專門學校授業補助囑託　影山清美
自今月手當金貳拾五圓給與　（十二月十八日）
眼科學副手ヲ囑託ス　（十二月二十三日）　堀雅壽
金澤醫學專門學校講師　石坂伸吉
自今月手當金五拾圓給與　（十一月三十一日）
金澤醫學專門學校藥學科副手囑託　加藤健之助
依願囑託ヲ解ク　（一月四日）
外科學副手ヲ囑託ス　（二月一日）　廣瀨淵龍
外科學副手ヲ囑託ス　（二月一日）　西坂武茂
金澤醫學專門學校講師　福岡喜洋
自今手當金ヲ支給ス　（二月一日）
金澤醫學專門學校內科學副手囑託　酒井碩治
依願囑託ヲ解ク　（二月九日）
金澤醫學專門學校婦人科學產科學副手囑託　鷹見義郎
囑託事務勉勵ニ付手當トシテ金貳拾圓給與　（三月十一日）

○會員動靜錄

○松浦龜太郎氏　本會贊助會員たる同氏は青森市立病

院長奉職中なりしが過般宇都宮縣立病院院長に轉任せられたり

○田上清貞氏　獨乙 Würzburg に研讀中の同氏は一月二十三日左の如き通信を寄せられたり

謹啓本年は稀有の好天氣にてチラ〳〵と雪降りし事僅に二三度例の氷滑も出來不申候。當地には目下邦人十余名在留し生沼君も直く横町に下宿致居候。此頃は實に「アスケンバール」の盛なる時節に御座候。小生は遲くとも明年（四十三年）の末迄には歸朝の豫定に有之候。近頃は當地の葡萄酒の味も少々知り申候。御序に會員諸君へ宜敷賴上候。

○林　可一氏　大坂市西區九條町土井病院醫員として奉職中の氏は昨年十二月一日一年志願兵として歩兵第七聯隊へ入隊せられたり

○服部暢助氏　靜岡縣富士郡大宮町富士病院醫員として奉職せらる

○加藤鍬作氏　東京醫科大學耳鼻咽喉科教室に在勤中の氏は今回研究のため二月三日獨國へ向け横濱を解纜せし旨通信ありたり

○石黑均造氏　久しく病褥にありし同氏と悲哉本月十九日長逝せられたり

○河合忠次氏　滋賀縣立彦根病院外科部に奉職中の氏は今回同院内科部に轉科せられたり

○北川光雄氏　東京田代病院にありし氏は今回前橋市に於て前橋天眞堂病院を開院せられたり

○遠山正輝氏　北川光雄氏と共に前橋天眞堂病院を開院せられたり

○柳原茂樹氏　名古屋私立病院好生館に醫員たりし同氏は今回辭職歸鄉せられたり

○高伊三郎氏　本月十五日陸軍々醫學校を退校せられたる同氏は過般專攻學生として更に同校へ入學を命せられたり

○小林　進氏　德島市寺島町古川病院に奉職

○三田村直氏　今回「富田」と改姓せらる同氏は現に東京淺草樂山堂病院醫員として奉職せらる

○加藤錠吉氏
○岡　勝重氏
○宮村誠一郎氏
○才田猶次氏
○田中三彌氏
○鈴木於蒐吉氏
○吉川友信氏
○伊藤哲一氏
○梅岡幸三氏

見習醫官として歩兵第七聯隊に入隊せらる

○吉澤祐寛氏
○中谷内善雄氏
○鈴木琢磨氏
○中川善松氏
○奥山正雄氏
○早川清延氏
○寺田久十郎氏

見習醫官として歩兵第三十五聯隊に入隊せられたり

高岡市東病院に奉職せらる

○新年拜賀式

鷄年鷄日の元旦午前九時より、講堂に於て拜賀式を擧行せらる、職員生徒一同謹んで御眞影を拜し奉り、生徒總代は新年の祝辭を述べ、校長また職員を代表して祝意を述べらる。共に皇德を仰き奉り陛下の萬歲を三唱して撤式す

松原教授の新任

曩に精神病學擔任が内科學擔任より全く乖離せられて其講義擔當者の必要を見るに至るや、篤學なる先輩、松原氏は其適任者として、愈々累年幾多の腦漿を搾つて蘊蓄せられたる智囊を繙て其豐富なる内容を頒たるゝの好期に遭遇す、洵に欣悅の情に堪へざる也、氏は明治三十一年十一月第四高等學校醫學部を卒業するや直に東京醫科大學病理學及び精神病學撰科に入て其微を索め、粹を探り、其後醫科大學助手又は東京府巢鴨病院醫員として其識見を廣濶にせらる、然れども囂氣滿々として大に將來に雄飛せんする氏は小心翼々たる子々輩の如く決して之を以て滿足せず、更に一歩を進めて精神病學研究設備の最も發達せる北米合衆國に渡り三十六年十二月より紐育州立精神病理研究所に入り昨年十二月迄研鑽を重ぬること五星霜、其蘊蓄の深大なる事揣摩するに餘りあり、然れども余輩は單に嶄新なる知見に富るを以ての故に大に氏を歡迎せんとする者にあらず、學事に熱烈なる氏が當世罕に見る處の修德者として寧ろ大に歡迎師事せんと欲するもの也、吾曹が、そこはかとなく氏を賴母敷感ずる所以のものは、職として此點に由るものなりと斷言するに趦趄せず、殊に道義幾んど地に墜ち、人情紙よりも薄き塵世に於て崇高なる人格の修養者として氏を欽仰せざる克はず、先に氏が八田氏に寄せられたる書信に見にたる如く人の價値は知識に由らずして其人格に在りと道破せられたるより洞察するも其修養の那邊に在りや蓋し思半ばに過ぎん、其他本會雜誌通信欄に掲載せられたる人格修養談並に實業の日本雜誌を愛讀せらるゝの事實に徵するも奈何に氏が英氣横溢して雄志磅礴、物に接し、事に應じて益々激奮して其人格知能を修餐せらるゝや明

けし、聞說らく氏や人と交るに毫も城府を設けず、虛心坦懷にして衒耀の氣更になしと、應ふに其胸襟の寬裕なるは氏が人格修養の顯現の一端として見るを得ん乎之を要するに吾人は覇氣鬱勃たる少壯有爲の智德兼備者として滿腔の赤誠を棒げて歡迎し師事するに於て決して人後に落ちざるもの也、聊か歡迎の辭と爲す　（つゞ生）

○柔劍道寒稽古開始

頃は師走の六日、午後五時半空どんよりと黑ずみて、降り來る雪は横吹雪ドウ〳〵と物凄しく、電柱に叫びあり屋根に聲ある巷閭を、按摩も今日は夜業を廢しけんを、さるにても大手町の一隅より發するアノ劍戟の響!! オーかの叫び!! より正しく幾百の勇士、今や戰の最中と覺へたり、嗚呼壯なる哉青年の意氣、皇國二千戴史の花の頁は武士道にあらずして何ぞ、花物言はず月語らずしかも累々たる神州男子の血は絶にず世紀を流れていよゝ潔し

○陸軍衛生部依託生氏名

明治四十一年十二月二十二日附辭令を以て陸軍衛生部依託生に任命せられたる氏名左の如し。

醫學科二年　米田外男　廣瀨竹次郎　國田武雄　豐田今吉郎　加藤末吉　菱川瀧太　內藤一郎　牧野新之亟　御影藤太郎　柴野昇　坪倉利　西村福太郎

藥學科三年

醫學科三年

○十全會講話會記事

◎第四十三例回

長公記

明治四十一年十月廿四日午後二時濟々堂で開かれた、此の會は金子博士が講話部長になられての第一回で有る、金子先生は我々五百の健兒の常に隨喜し渴仰せる偉人、校長高安博士を我校の總理大臣とすると金子博士は現今の西園寺侯だ、此の先生を部長に頂いた講話部は今後非常な發展をなすだろうとは何人も希望し又豫期して止ま

ぬ所である、

各部長上田教授が講話部の爲めに御盡しくださつた勞の多大なることは諸君の共に知る所、我等は我部の大隈伯として心から鳴謝致します

金子部長

▲開會の辭

▲醫師と人格　通常會員　港久助君

音聲朗々たる君は劈頭一番當今學生の欠点を擧げて延ひて近時の醫師の人格に論及せらる

▲希望（講話部に對する）　金子教授

先生堂々たる風姿を拉げて壇に登らる、金玉の言溫情の句交々至り聽衆をして自ら襟を正をしむるとのあり、終に本會の發達を計るには會數を增加せざるべからず、又會をして家庭的團欒たるとのたらしめざるべからずと

▲死の研究　通常會員　石田九成君

アーメン的。語調　悲愴なる演舌は氏の特長なり、本日の演題實に適せりと云ふべし

▲何者かに就て　特別會員　佐口榮君

學者的なる君はゴルギ氏法によりて造りし數箇の標本を示し詳細に述べらる

1脾の交感神經、2肝毛細分泌道、3膵分泌毛細管、4同上色素注入、5胃液の黑染、

▲膵臟に就て　特別會員　池田菱吉君

熱誠なる然かも滑稽的趣味に富みたる演舌なり

▲エルフレッヘン（獨乙語）　通常會員　鈴木正孝君

力鷄を割くに足らず然かも滿々たる野心は君をして今日あらしむ

▲學生の元氣　阿部教授

新任教授の言なるが故に殊更に多大の趣味を以て聞かれたり、我國の進歩は泰西に進及せしのみにて決してより發達せしには非ず、諸君青年たるもの其の燃ゆるが如き元氣を以て奮勵し益々發展を期せよと懇々と警戒を與へられぬ

▲醫專主義（イセニーズム）　通常會員　長井敬孝君

我金澤醫學專門學校は北陸に於ける最高の學府なり、吾校學生たるもの又北陸學生團の覇者たらざるべからず、德育に智育に体育に、此の主義を以て我が會員諸君の主義にせはやと述ぶ、（自抄）

▲ツベルクリンの眼瞼注射に就て　高安博士

フイッシャドクトルの研究を紹介せられたり

眞執なる態度然かも洒々たる語氣を以て且つ眞面目なる演舌は會長の會長たる所謂なり

▲閉會の辭　金子部長

時に午後六時

當日は通常會員の多數が來會してくださつたのと、會長が午後特別の多忙だつたのにもかゝはらず出席してくださつたのは本會の爲めに感謝致します、

◉第四十四回　津田生

四十一年度最終の十全會講話例會は十二月十九日午後一時より本校濟々堂に於て開催せられたり、來會者は職員、醫員生徒等合せて無慮三百名、出演者の演題又醫學上趣味あるもの多くして、可なりの盛況を呈せしは講話會の前途に向て最も歡嬉すべき現象と謂ふべし、今左に講話の梗概を記述せむ

▲開會の辭

金子部長は例の如く愼重なる態度と穩健なる言辭を以て本學年第三回講話例會を開催するに到りし由來を陳べ、併せて講話會の彌々隆昌に趨くは余の欣喜に堪へざる所にして爾後益々諸君が本會の旺盛を策り、智識の交換と心情の融和とを完うするを得るの期に達せん事を冀望する旨述べられたり

▲基礎獨乙語と基礎羅甸語に就て　通常會員　佐藤祐造君

前回に引繼き熱誠を揮ふて、ろの研學したる所見を述べらる、蓋し人は其最も得意なる瞬間に於て能くその個性を曝露するものとすれば、君やげに熱心率直の士なり、希くば好漢愈々黽勉する所あれかし。

▲The seven stars　通常會員　村松純吉君

すら〳〵と宛ら縷を引くが如く演ぜられたるも忌憚なく申せば感情がこゝ一段こもれば上々ならん乎。

▲自由　通常會員　井村勇作君

吾人が世に處するに嚴密に自已を省察し內觀する時は必ずや圓滿なる自由を得るものなからん、余輩措大とても多少社會、學校、家庭等の束縛羈伴を享く、束縛は常に不快の情緒を隨伴するものにして煩悶苦痛を誘起す、されば吾人はこの制限の狹苍を超脫して茫漠たる絕對晏如の樂地に濶步せざる可からずと喝破し、更に語を進めて論ずらく吾人が所謂眞個の自由とは、絕對なり無限なり、然るに自已の成立上に於て吾人は元來有限なり、相對なり、此有限と無限との兩極端は一見自家撞着する如く觀察せらるゝも決して然らず、究極する處は、矛盾の一致に歸着するものにして、詮ずるに吾人は圓滿完備の自由を得んとするには絕對無限の實在（即ち超自然的不可思議力）を信憑せざる可からずと唱導し、エピクテート

の自由なる獄中生活の實例を引證して堂々の論陣を張らる、憶ふに自由とは吾人が希望の最勝なるものにして、自由の爲には人相爭ひ、國相戰ふ、學者は自由を研究し、詩人は自由を歌ふ、噫自由ほど人に寵愛せらるゝものはあらざる也、されど其發揮せらるゝと否やとに關せず、自由の眞精神は吾人の心裡に存在するは毫も疑ふべき事にあらざる也、請ふ諸氏沈思三考する處あれ。

▲吾が親愛なる醫專校

通常會員　長井敬孝君

余は元來大學崇拜者にして、專門學校を侮視したりしも一昨年或動機に緣りて大に醫專校を親愛するに至れり、醫師として人類の生靈苦憊を救拯するに必らずしも大學に入らざる可からざる道理なし、學理の蘊奥を探求するは大學は便宜ならん、又獨乙語の進捗の程度は職として個人の勉否に由るものにして、獨乙語の不熟練は寧ろ自已を興奮せしむるの刺戟劑となるもの也、と論張し、吾人は須らく煩瑣なる細事に齟齬して徒らに不平を鳴らさず、眼界を廣濶にし、滿足を以て力となし、安慰を以て念となし、以て意氣揚々として遠大の志望に向て着々其歩武を進めざる可からず、とて嘗て大隈伯が青山博士の人材を嘆稱してあはれ氏を政治家にせしめ得ざりしを遺憾とすと惋惜せられし事實と、熊澤蕃山及び後藤男等が素と一介の醫士にして遂に偉大の功績を爲しゝ實例を捕捉し來つて滔々論じ來り論じ去る處、意到り口隨ひ、熱情横溢して一脉の活氣あり、唯吾人は君が論鋒の餘りに鋭利にして、從つて急忙のけはひの仄見ゆたるは聊か遺憾とせざるを得ず。

▲ペスト病毒の傳播に關する蚤のデモンス

通常會員　奥山義盛君

トラチオン

曾て老川君が由良港より齎來せられたる蚤に就て研究せられ、先づペスト病毒の蚤に依りて傳播せらるゝを實例に憑りて明示し、且其傳染の方法及び蚤の胃中糞便中にペスト菌の發育增殖する事を説明し、而して最も吾人に密接の關係ある五種の蚤即ち一 Pulex irritans 人蚤（無櫛有眼類）二 Pulex cheopis 鼠蚤（無櫛有眼類）三 Ceratophyllus fasciatus 鼠蚤（無櫛有眼類）四 Cutenopsylla musculi 鼠蚤（有—無眼類）五 Cetenocephalus canis 犬猫蚤（有櫛有眼類）に就いて其氣候及宿主との關係を陳べ、次で蚤一般の形態、發生、雌雄の識別及び各種類の相互の鑑別点を列擧せられ、最後に其性質上並に實際上に於ても最も多くピウレッキス、ケオピスがペスト病毒傳播の媒介者たる事項に論及されたり、尚供覽標品として、蚤の幼虫、蚤の各種類に就き各雌雄一對、蚤の胃中のペスト菌、及び對照としてペスト菌の培養したるもの

等十數種を供覽せられたり。

▲蚤のテモンストラチオン　特別會員　田中基保君

余の供覽標本なる五種の蚤（雌雄一對宛）は十一月下旬大坂府檢疫官たる松王數男氏より高安博士に寄贈せられしものを更に高安博士より余に紹介せられたるものなりとの冒頭を置き業に奥山君は老川氏より寄贈せられたる蚤に就き各種類形態發生傳染經路の關係等を詳細に演述せられたれば、只補遺として蚤の發生經過（卵、幼虫、蛹、成虫）及び當該豫防法並に其習慣等につき簡單に陳べられ、次で松王氏が高安博士に報告せられたる書狀を朗讀せられ、且つ金澤地方にも Pulex cheopis の存在せるや否や、後日研究の結果報告すべき旨述べられたり、松王氏が書狀（十一月廿八日出）の大要は兵庫縣沿岸殊に由良町、神戸市、西の宮町及大阪市に於けるペスト病勢頗る猖獗にして、九月頃より傳染病研究所員理學士小泉丹、外一名該地方に出張し鼠蚤研究の結果從來我國に於て未だ曾て發見せざりし Pulex cheopis を多數に發見し、殊に小泉氏が由良町に於ける作業中の注目すべきはペスト患者に向つてモルモットを放ちしに 70%－80% 迄陽性成績を得即、二十四時間乃至四十八時間中に自然感染を爲し該モルモットに螺集する鼠蚤（ケオピス最も多し）は悉〳〵菌携帶蚤なるを確證せられし事にして、由良町に於ける鼠蚤中ケオピスの含有量 30%－40% にして由良以外の淡路各町村に於て買收する鼠族に就てはケオピス含有量 12% 强に該當し、次に大阪市に於ける含有量は 12% 弱に相當する事及ケオピスの歴史的關係、殺蚤方法其他之に關聯する研究事項湧出し來り從て從來の豫防消毒方針に一革新を惹起すべしと云ふに在り。因にペスト病毒傳播に關する蚤の研究に就き詳密なる事項は、當該研究者より十全會雜誌に登載せらるゝ筈なれば簡畧に記述したり。

▲腦動脈の栓塞の一例　特別會員　今村文碩君

氏は山碕内科に於て親しく實驗せられたる殆んど定型的症候を完備せる本症の珍らしき一例に就き其患者の詳細なる臨床的症候、經過、病理等を說明せられたり。

▲赤痢の病源に就て　特別會員　福岡喜洋君

先づ赤痢菌の發見に就き、文獻上の所見を列擧し、次で赤痢菌の種類（異型）に就き、レンツ氏、ヒス氏、及び志賀氏等諸家の說を辯明し、最後に氏の研究檢出せられたる赤痢菌の一異型に就き報告せられたり、即櫻木病院に入院せる確的の臨床症候を具備せる一赤痢患者の糞便中より赤痢菌を分離し之を遠藤氏培養基に培養せしに二

種の異型なるものを得たり、而して共に赤痢血清に凝集反應を呈するを以て赤痢菌と見做し得べきを以て假りにF菌及T菌と命名したり、然るに其後の研究に由りてF菌は果して志賀に相違なかりしもT菌は未だ文献上に見出さざるものなる事を殆と確認したりとて両菌の標本及培養基の培養狀態の標本等を供覽せられたり、尙氏は動物試驗を爲して更に詳細なる報告をなさるゝならん。

▲腦の重要なる回轉及溝の測定法に就て　石川教授

腦の重要なる溝即ち正中裂及側裂並に腦の回轉位置測定法たるクレーンライン氏法、クンニングハム氏法及能勢（靜太）博士の四分法等を細密に說明し、次で教授の實驗研究せられたる數例を參照して其優劣と特長とを比較論評せられたり其詳細なる事項は既に先生に豫契して其認諾を得たれば何れ後日の誌上に掲載せらる可ければ之が記事を省畧しつ。

▲肺結核の早期診斷法　山碕教授

先づ本年九月二十六日米國フイラデルヒヤに於て開催せられたる萬國結核會議に於て、カルメット氏が肺結核の早期診斷法は現今の醫學上個人的又は社界的關係に於ても頗る緊要なる事由を比喩と例證とを以て辯述したる事を推讃し、次でベーリング、コッホ其他諸家の人と牛結核傳染との關係、モルフハン、バザン氏等が腺病及狼瘡に就て研究したる業績を陳べ、且つ巴里及び伯林の衞生的調査、ヂルト氏の調査に係る死躰陳列場に於ける屍躰解剖成績並に近時報告せられたるアルバイト等に就き演述せられ、更に肺結核の早期診斷法たるペンツオルト氏の躰溫移動性檢査法、ヱールリッヒ氏ヂアツオ反應、ロビン及ビチット氏の瓦斯交換測定法、グランヘル氏の精密聽診法、X光線檢査法、ライト氏のオプソニン、インデックス檢査法、其他ツベルクリンの皮下（注入）法及び點眼法等を說明して其優劣可否を論評し最後に教授が本年五月より金澤病院に於て患者六十三名につき實驗せられたるツベルクリンの反應狀況を詳細に報告せられたり、六十三名の患者を甲（肺結核と確定したる者）乙（肺結核の疑あるもの）丙（肺結核を毫も臨床上證明し得ざるもの）に分類せしに、甲類は二十七名中陽性成績を得たるもの二十名、他七名は陰性、乙類は十九名中九名は陽性、他十名は陰性、丙類は十七名にして中三名丈け陽性成績を得たりしが該三名中一名は脊髓癆なりしも屍躰解剖の結果上腸間膜腺の乾酪變性及腸に微細なる結核竈ありき、又一名は脊髓炎にして診察當時結核の臨床症候を證明し得ざりしも七年前結核に疑しき診斷を受けたる事ありと、殘りの一名は神經衰弱症と診定したる者にして恐

らくは結核の潛伏せるものならんと、而して教授の實驗せられし結果に據ればツベルクリン反應の最も早く現れしは點眼後四時三十分にして最も遲きは四十八時間以上を要せりと謂ふ。

尙本日は小野澤君の「始めて演壇に立つ」及池田菱吉君「睟に就て」てふ出演あるべき筈なりしに時間の都合上之を完了する能はざりしは大に遺憾なりき。

恁くて金子部長の閉會の辭ありて午後六時半頃明治四十一年度最終の十全會講話例會は尨大なる夜の黑幕の裡に包まれ畢んぬ。（文責は記者に在り）

○左記特別會員諸氏より本會へ年賀狀を送らる

松久祐馬君　山口辰五郎君　松江英五郎君
田上清貞君　山口榮君　山內兎毛君
河合麿君　深瀨信三君　今井貫一君
鈴木實君　山下鋲吾君　石橋四郎君
酒井利勝君　佐々木靜君　加藤鍬作君
下條正夫君　武藤匡一君　澤賢吉君
林可一君　千田常外君　竹松衞君
岡田甚英君　桑折直君　杉本恒治君
中川喜平君　池田敬一君　坂本信一君
建部鈴次郎君　島田義一君　高野友衞君
杉山政長君　溝口龍三君　太田長作君
長井運男君　藤浪謙君　島誠郁君
笹岡芳名君　富久尾湊君　淺田耕造君
菊池文岱君　清水秀夫君　田代保二君
近藤琢磨君　熊西中藏君　河崎正雄君
山本幹雄君　高松多齋君　野村亮吉君
河崎有作君　太田精一君　宮川薫君
濱地藤太郎君　吉川砥直君　星野正齊君
高野宗重君　黑田眞岳君　西正胤君
松王數男君　彦坂誠一君　北川健三君
青木正枝君　上坂政太郎君　林京次郎君
長村長太郎君　河合忠次君　原田悅五郎君
布村祥君　八木德太郎君　岩崎勝治君
岡島敬治君　谷澤一郎君　尾崎平吉君
月原秀範君　笹田順二君　辻村耕夫君
須賀猪次君　堀政次君　藤井榮四郎君
榊原久君　河野勇君　吉村一馬君
辻本辰之助君　丸山六郎君　青木市次郎君
木越豐松君　吉田幡誠君　中西島吉君
秋山八百藏君　宇野正君　鈴木俊定君
中谷正範君　宮井勇君　福島可鋪君
伴鐸也君　北豐吉君　大橋豐君

林　良吉君　三股梅吉君　太田他計作君　高松岩吉君　館　昇榮君
高桑勇次郎君　金堂　圓君　田中義雄君　上遠野與作君　種子田秀吉君　平澤嘉圓君
津田博明君　杉部多米吉君　安積　鼎君　井口太四郎君　藤崎榮吉君　笠上吉松君
松井清君　大西瀨治君　中島喜作君　政山龍雄君　津田信吉君　朝倉重敏君
富田寛君　英　軒二君　安田三木君　田村圓四郎君　橋　三九君　島田吉三郎君
平田一若君　原　久雄君　茂居政治君　岩津智造君　本田三郎君　武田粂藏君
辻岡律君　齋藤義雄君　喜多養元君　尾倉一英君　敷波重次郎君　木下克雄君
乾　一夫君　三崎吉太郎君　古屋榮治君　井原　悟君　林　正雄君　神岡藤一郎君
石橋三也君　鶴見一久君　山田茂樹君　村本淳吉君　諸角友平君
新谷成三郎君　稲崎龍助君　中村　惠君　岩田　一君
石田五佐君　島村伊之助君　原田正廣君
高井魯一君　梶川甚一君　諸橋林太郎君
森田齋次君　早瀨三求君　須藤庄太郎君
辻井禮太郎君　林田信平君　太田勘市君
加藤　寛君　池川周次郎君　今井外吉君
額　又太郎君　杉田治十郎君　勝木直吉君
金子義長君　久保　武君　內田理治君
平原雲新君　橋本監次郎君　龍田恭齊君
草野佐一郎君　中村弘齋君　勝股　享君
千葉　茂君　小田利吉君　佐藤　武君
眞澤貞一君　橋　薫君　谷口長松君
都築熊藏君　岡田虎介君　赤松省君

○體操科教師の需用を體育の發展に伴ひ近來著しく增加せると共に各學校に於ては同教師の人格に重きを置き待遇等も大に面目を改め競ふて良教師を要求するに至れるを以て該科教師の養成を以て世に知られたる在東京日本體育會體操學校に於ては先般文部大臣の認可を經て本年四月に入學せしむべき生徒より入學程度を高め修業年限を延長し今回大々的擴張に努めつゝありと尙ほ卒業者は無試驗檢定を以て中等教員免許狀を下附せらるゝ由志願者の願書提出期日は本月三十日迄なりと云ふ

○學校衛生學列國彙報の特別提供　學校衛生學列國彙報は、獨逸學校衛生學會會頭グリースバハ博士の編纂に成り、毎年四冊宛を發行し、英佛獨三ヶ國語を以て、世界各國の學校衛生に關する論說を揭載する、有益の學術雜誌なるが。萬國學校衛生會議列國永久委員會の機關雜誌とする事に決議し。同時に該彙報の購讀者に、便宜を與へん爲め、發行書肆との間に、特別減價の約束を爲したるに就き、此趣を、汎く同學諸氏に披露せられたき旨、三島博士に依賴し來りたる由。其方法は左の通りなりと。

學校衛生列國彙報直接購讀減價の約定

1 學校衛生學列國彙報は、英佛獨の三國語を以て編纂し、毎年四季一冊宛を發行し、一卷を四冊六百四十頁とす。

2 右彙報を、直接左記の發行者に注文して購讀せらるる場合に限り、一ヶ年の購讀料を金拾馬克とす。

但し他の書肆の手を經るものは、從前の通り金貳拾馬克なり。

Internationales Archiv für Schulhygiene 直接購讀申込書肆

Wilhelm Engelmann, Leipzig (又は Masson, Paris; Mac Millan, London.)

3 此特別減價は、直接購讀者の數、二百名以上に達したる時より始めて尙ほ百名以上を增す毎に、購讀料を漸次遞減すべき豫定とす。

4 此の減價購讀方法は、本年發行の、學校衛生學列國彙報第六卷より之を實施す。

5 直接購讀者の氏名は、之を彙報紙上に揭載すべき筈に付。此際速に直接購讀の申込みあらん事を希望す

○十全會會員名簿脫漏追加及訂正

賛助會員

宇都宮縣立病院　病院長　松浦龜太郎

特別會員

イ、井の部

富山縣中新川郡早月加積村大字笠木（刪除死亡）　開業　石倉宗嗣（高倉改）

福井市老松下町仁壽生命保險會社支店內　醫員　石黑均造

大村衛戍病院附　藥劑官　稻崎龍助

歩兵第三十五聯隊　見習醫官　伊坂春

ロの部

熊本備戍病院附　藥劑官　六嘉孝光

ハの部

海軍々醫學校　軍醫　萩野茂次郎

靜岡縣大宮町富士病院　醫員　服部暢助

歩兵第三十五聯隊　見習醫官　長谷川愛之助

歩兵第七聯隊　一年志願兵　早川清延

ホの部

石川縣石川郡大野村觀音堂　開業　林可一

金澤醫學專門學校眼科學教室　副手　本田三郎

トの部

前橋市神明町前橋天眞堂病院　開業　堀雅壽

ヲ、オの部

國府台備戍病院　軍醫　遠山正輝

軍艦浪速　軍醫　小原芳雄

舞鶴海軍病院附　軍醫　大西瀨治

和歌山市徒町二桑原虎太郎方　軍醫　小野醇吉

ワの部

長野縣上水内郡古里村三九五　軍醫　岡崎虎次郎

カの部

滋賀縣丈土郡彦根町公立彦根病院　醫員　大住惠

洋行中　研究　若槻寛隆

歩兵第七聯隊　見習醫官　桂定治

廣島病院眼科　醫員　加藤錦吉

金澤病院外科　研究　河合忠次

ヨの部

山形市十日町　開業　梶川甚一

レの部

京都醫科大學外科教室　研究　加藤鍬作

ソの部

研究　韓清泉

研究　厲家福

ツの部

副田實成

金澤醫學專門學校眼科教室　副手　月岡勝治

ナの部

歩兵第七聯隊第十一中隊　一年志願兵　長村吉太

舞鶴水雷團附　軍醫　長井運男

歩兵第三十五聯隊　見習醫官　中谷內善雅

東京府豐多摩郡大久保村字西大久保三八七　並河正雄

ムの部

長崎縣北松浦郡大野村　技手　村尾純昌

ウの部

由良衛戍病院附　藥劑官　上田英雄

福井縣今立郡國高村高末　上木隆基

ノの部

野村義雄

クの部

東京牛込區天神町一九　楠正之

ヤの部

岐阜縣稻葉郡南長森村油畑　醫員　柳原茂樹

熊本縣立病院　醫員　山崎正薫

富山市赤十字社支部病院　山崎太一

マの部

騎兵第十三聯隊附　軍醫　松浦啓三

フの部

金澤醫學專門學校內科教室　副手　福田美明

石川縣能美郡根上村中ノ庄　開業　藤田藤右衛門

コの部

佐世保衛戍病院附　藥劑官　小林吉五郎

岐阜市今泉區柳町　駒田一正

サの部

金澤病院產科婦人科　齋藤銀一郎

佐竹清吉

キの部

前橋市神明町前橋天眞堂病院　開業　北川光雄

ミの部

台灣山砲兵第一中隊附　軍醫（三田村改）　水上俊三

東京淺草樂山堂病院　醫員　富田直

歩兵第七聯隊　見習醫官　宮村誠一郎

シの部

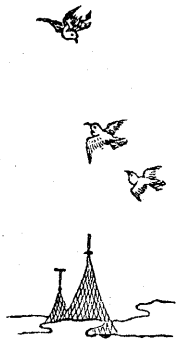
石川縣鹿島郡相馬村　柴田順三

セの部

金澤病院藥局　調劑員　關戸辰次郎

スの部

軍艦宗谷　軍醫　鈴木寛之助



會告

○寄贈及交換書目

（三月十日領收ノ分）

日本醫事週報　七二九、迄　同社

醫海時報　七六八、迄　同社

東京醫學會雜誌　二三ノ四、迄　同會

東京醫事新誌　一六〇四、迄　同社

日本眼科學會雜誌　一三ノ二、迄　同會

中外醫事新報　六九四、迄　同社

軍醫學會雜誌　一五五、迄　同會

順天堂醫事研究會雜誌　四三四、迄　同會

治療新報　八三、迄　同社

大日本私立衞生會雜誌　三一〇、迄　同會

成醫會月報　三三、迄　同　發行所

北海醫報　八ノ四、迄　北辰病院研究會

京都醫學會雜誌　六ノ一、迄　同會

臺灣醫學會雜誌　五五、迄　同會

產科婦雜誌　二一、迄　日本產科婦協會

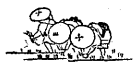
日本助產婦新報 一三〇、迄	同	發行所
神經學雜誌 七ノ一三、迄	日本神經學會	
醫學中央雜誌 七二、迄	同	社
國家醫學會雜誌 二六二、迄	同	會
北越醫學會雜誌 一六七、迄	同	會
中央醫學會雜誌 八四、迄	同	會
藝備醫事 一五三、迄	同	社
岡山醫學會雜誌 三三九、迄	同	會
廣島衛生醫事月報 一三三、迄	同	社
鎮西醫報 一二八、迄	同	社
莊內醫學會々報 六八、迄	同	會
藥學雜誌 三三四、迄	日本藥學會	
藥石新報 六七二、迄	同	社
治療藥報 四五、迄	同	會
助產ノ栞 一五三、迄	緒方助產婦學會	
千葉醫學專門學校々友會雜誌 四五、迄	同	會
醫事新聞 七七六、	同	社
大日本耳鼻咽喉科會々報 一四ノ六、迄	同	會
好生館醫事研究會雜誌 一六ノ一、迄	同	會
皮膚科及泌尿器科雜誌 九ノ二、迄	日本皮膚科學會	
日本消化機病會雜誌 七ノ六、迄	同	會
臨床彙講 三三、迄	醫學書院	
眼科臨床報 三八、迄	北越眼科研究會	
東洋醫事新報 二四、迄	私立東京醫學校編輯部	
道修藥報 二七、迄	同	社
大阪醫學會雜誌 八ノ二、迄	同	會
體育 一八三、迄	日本體育會	
龍南會雜誌 一三九、迄	同	會
靜岡縣醫學會々報 二三、迄	同	會
醫事月報 三ノ一、二、迄	同	社

○自四十一年十二月十二日至四十二年三月十二日校外十全會費納付調書

金額	期限	氏名
金參圓	(自四十一年度至四十二年度三ヶ年分)	藤浪謙君
金壹圓	(四十一年度分)	德木千秋君
金參圓	(自四十一年度至四十三年度三ヶ年分)	中谷內善雅君
金貳圓	(自三十九年度至四十年度二ヶ年分)	加藤慶三君
金壹圓	(四十一年度分)	河村賢太郎君
金參圓	(自四十一年度至四十五年度五ヶ年分)	黑川由巳君
金參圓	(自四十二年度至四十六年度五ヶ年分)	太田精一君
金四圓	(自四十一年度至四十五年度六ヶ年分)	種子田秀吉君
金壹圓	(四十年度分)	林篤君
金參圓	(自四十一年度至四十五年度五ヶ年分)	田村圓四郎君

金壹圓	（四十二年度分）	岡田虎介君
金參圓	（自四十一年度至四十五年度五ヶ年分）	井口正察君
金參圓	（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）	澤賢吉君
金參圓	（自四十三年度至四十七年度五ヶ年分）	原田正廣君
金四圓	（自四十年度至四十五年度六ヶ年分）	米村吉太郎君
金參圓	（自三十八年度至四十年度三ヶ年分）	平田一若君
金五圓	（自三十九年度至四十五年度七ヶ年分）	松田研吉君
金四圓	（自四十年度至四十五年度六ヶ年分）	橘佐內君
金參圓	（自三十九年度至四十年度三ヶ年分）	橘三丸君
金五圓	（自四十三年度至四十九年度七ヶ年分）	飯森益太郎君
金五圓	（自四十年度至四十六年度七ヶ年分）	千葉玄也君
金壹圓	（四十年度分）	清水秀夫君
金參圓	（自四十年度至四十二年度三ヶ年分）	山本幹雄君

以上



廣告

▲雜誌部委員ヨリ▼

一、宿所姓名等ニ誤謬又ハ變動アリタル諸君ハ必ス本會宛ニ御通知下サレタシ。然ラサレバ雜誌ノ送達遲延イタス恐アリ。

二、前號雜誌ヲ未タ御接手ナキ諸君モ御通知ヲ乞フ。

三、御實驗ナサレタル事ニシテ珍奇ノモノ等ハ成ルベク御報告ヲ乞フ。

四、次號ノ原稿ハ切期日ヲ四月末日ト致シマス。

拜啓過般辱知諸君ヨリ小生錦地在職紀念トシテ貴重ナル青銅製花器壹對御贈與ヲ辱フシ光榮身ニ余ル次第ト深ク御禮申上候付テハ一々御答禮可申上筈之處御住所不明ナル爲メ其儀ニ及兼候諸君多數ニ有之此等ノ諸君ニ對シテ甚タ不本意ナカラ紙上厚ク御答禮申上候敬具

明治四十二年一月

仙臺市　湯目隆績

◉會員諸氏ニ告グ

來ル四月三日午前九時ヨリ東京醫科大學東講堂ニ於テ第七回日本婦人科學會總會相開キ候間御繰合セ御來會被下度此段得貴意候

追テ御出演ノ向ハ三月十日迄ニ演題ト共ニ當事務所ヘ御申込被下度候

明治四十二年三月

東京醫科大學婦人科教室內

日本婦人科學會

週刊 東京醫事新誌

▲定價一部金十二錢△半ヶ年分（二十六冊）前金二圓七十五錢△一ヶ年分（五十二冊）前金五圓二十錢（以上無遞送料）

▲見本は往復葉書にて御申込あらば送付す

今春を劃して舊套を脫し面目を一新したる本誌は臨牀講義、原著實驗、診療要報、內外抄錄、雜纂、譯纂、叢談、會報、新藥、言論、官報、雜報、の欄を包含し材料豐富、趣味多樣、眞に學術と時事との二方面を兼備せる絕好の醫學雜誌たり

發行所　東京々橋區南小田原町四ノ五　東京醫事新誌局　振替貯金口座一七九六八番

▲講習生は日本消化機病學會會員に限る▼

◎消化機病學第八回講習

（講習期）自明治四十二年二月十日至明治四十二年四月三十日

（講習生）三十五名募集

右講習生ヲ募集ス

東京市麴町區內幸町一丁目三番地

胃腸病院（電話新橋百六十八番）

▲規則書入用の方は二錢郵券同封申込あれ▼

第二十九回產科婦人科學講習

◎科目　產科手術學及婦人科診斷學

◎時日　四十二年三月二日より五月六日まで毎週火木土午後六時より八時まで

◎資格　醫術開業免狀所有者

右廣告す

規則書を望まるゝ人は郵稅二錢送らるべし

東京市日本橋區濱町三丁目七番地　產科　婦人科　楠田病院教室

○追想錄

本誌第五十一號紙上編輯部諸彦か多大なる割愛を得て聊か恩師小川勝陳先生御生前の性行閲歴、病況等に就て叙する處あり、其折廣く會員各位に向てかれて懷抱せらるゝ感想、逸事など聞かんことを望み且つ夙に能く恩師か爲人を信ト厚く交を結ひ給へし方々に特に之を拜承せん事を希ひしに我か願空しからす快ろく微衷の存する處を汲み特に手書して其追想の辞を寄せ給ふもの十又幾篇、今則ち追想錄と題し左の數篇を着信順により投載して永く恩師か遺風を偲ひ奉るの料とおし併せて門生一同に代り謹んで各位か深高なる御厚誼を感謝し奉ると云爾

明治四十二年二月十六日　於金城療病院　八田智証謹識

其一

能登球洲郡松波之里　藤岡勝治

拜啓致候本日十全會雜誌第五十一號落手早速披見致候處中に貴下執筆の「噫恩師小川勝陳先生」あり讀み了つて落涙潸々數刻に亘り申候貴兄の恩師に報する深きは云はずもかな先生の門生を遇せらるゝ厚き亦今更の如く思はれ申候御承知の如く生曩に不幸病を獲爾來枕と親しみ勝にて目下は往診を斷り外來患者のみを診療致居候有樣さらでも晩秋の風物一入淋しきに病客由來感情に脆く五十一號附添を讀み面のあたり先生に見ゆる心地して不覺卷を掩ひ候段御推察被下度候

先生の門下を遇せらるゝの厚かりしことは先生に敎を受けたるものゝ能く知る所なるが小生の如き開業以來既に十餘年其間書を飛はして疑義を先生に質したること幾回なるを知らす而も先生五月蠅しともせられず常に叮嚀親切に敎を垂れ給ひ其書函に滿つるに至る弟子を思ふこと深からずんは焉んぞ斯の如くなるを得ん余嘗て疑義あり某○○

に質すこと再三梨の礫のそれならなくに一向回答無之窃に○○の無情を憤りたることあり之を小川先生に比す天淵も啻ならざるものなり悔らくは先生の爪垢を煮て○○に頓服せしめさりしことを

明治三十三年秋余の金澤病院を辭して鄉里に歸るや先生贈るに九谷燒の菓子鉢を以てし給ひ且つ容器の蓋に筆を染めて曰く

秋夜與愁長　寤寐懷木郎
岩鼻や茲にも獨り月の客
勿謂山間無隣德豈孤哉孤哉

庚子中秋後一日　玄々道人

重恩の先生却て意を薄德の余か上に垂れさせ給ふ余たるもの奮勵先生に酬ゆる處あるべき筈なるに而も今將た奈何の狀そや先生の遺影に對し慙汗背に洽ねきを覺にさるなり

先生の逸話遺聞は追々申上くべく候病氣の爲めか筆を執るに懶く一時に書き終はるを得す候（中畧）

貴兄か先生に盡くされたる情誼は生等門下一同の深く謝する所に有之候先生終焉之記を讀んて泣かざるものは人にあらず抑も亦筆者眞情の流露にあらずんは安んぞ人を泣かしむる斯の如くなるを得ん噫小川先生の爲には其命に代はらんことを願ふ者十指を出てたるならんも某○○の爲めには恐らく一人もなからん平生德を植に道を修むる徒爾に非さるを信するなり草々謹言

十一月廿日俯臥の儘認む

其二

○小川先生の逸事 附 土肥博士日記の一節

東京醫科大學皮膚病學教授　土肥慶藏

水莖の痕美しくとゞめたり劔、いにし人が移りゆく世のよしあしごと、ことにつれて書いつられたるなど、こよのうゆかしきものはあらじ。人もすがる日記といふものゝ中にもよく其れも影を偲ばるゝ、おどて戒書にのみゆづるべきかは。漢詩壇の耆宿小野湖山が赤穗四十七士を一代忠臣一世師と歌ひ玉ひしも、近くば三上文學博士が橋本景岳を世界の少壯達識家と稱へ玉ひしおども、その至誠熱烈ふる墨色に覽られし、おかゝかに多かり。つれ〳〵書き遺せし斷簡零墨は、げによくその人の性格を寫すものぞかし、諺にも我生涯の一日は歴史の一頁なりとかや。

おつかしの師の君小川勝陳先生、肺を疾まれていぬる九月十六日雁か啼く金澤城下長町一番町の客舍に逝かると、あゝ悲いかな。われ教を受けし三十七年九月金澤醫學專門學校三年生の時第一限、新教室に於てわれ等に諭さるゝよう、胎兒の母體に在る猶ほ人の宇宙に在るか如し、と非才のわれか小さき心に強き印象を受けしは正に是れ。十全會雜誌第三十五號に雨絃風筝と題して、中に一項を加へたることありき。後ほと〳〵一ケ年、燈火親むべきのある夜われ保證人歸山家に京都八幡の高僧宗般禪師か薩訶般若波羅密多心經の講義を聽きぬ、先生亦われに後るゝ暫しにして來らる、われ乃ち先生に座を讓ること數次、この時先生われに言ひ玉へるよう、聽聞するの志は互に相同じわれ豈君が師ふるの故を以て今夕我に先んじたる君の前席に聽聞すべけんや、と遂にゆるさせ玉はず、席を隣りてわか次にれわしき。此夜傍聽終へて歸山家を辭し先生と共に道すがら語して歸る。偶々夕立雲油然として起り大粒の雨滴下し來る、われ味噌藏町の先生の邸前に到り別を告げんとす、さるを先生手取り止めて傘と下駄とを貸さんといはる、われ宿近きか故に固にも辭すれど、聽き玉はず、とうゞ傘のみを借りて品川町の鳩居に歸りたることありき。そのゝちわれ深く先生の教を請ふの機會を得ず。ことし土肥博士の許に在りて忽ち先生の訃を新聞紙上に知るを得たり、あゝ悲いかな。おつかしの師の君すでにおわさず、復溫容に接するに由ふし……。頃日われ恩師土肥博士に先生との交情を物語られんことを乞ふ、博士默然たること良々久し乃ち舊日記を筐底に探つて示さる、蓋し博士か大學卒業當時の記錄にして內に小川先生に關する數節あり、乃ち强ひて其許諾を得て其一項を左に淨寫す。庶幾くは之によりて先生の趣味と性格とを辿るの案たるを得ん乎。（文中の圈点は生の私かに加ふる所あり）

この日記のことがらを拜し、病床餘瀝の歌を誦する毎に思ふ。あゝ先生は自然を愛するの君子人ふるかな。まして敬慶の念、靈忘れさせ玉はざりし御母堂健かに、穉心の嗣子家にれわして猶世事を知り玉はず、悪闌空しく中道に凋むとは先生の謂ひか……。わか折ふし遊びし前田侯か

菩提所天德院精舍の鐘の音ひゞくうら山には數百年の苔蒸して松風庭を清むらん、空　智德院殿頓悟勝陳居士を痛むるの墓面、尙くは寒鴉啼いて菲才謭劣のわれ先生が親友たりし土肥博士の座下に熱血を濺いて追悼の志を致すを告げよかし、嗚呼。

銀屏の七草の繪や露繁し。

明治四十一年十一月三十日　　笹岡芳名記

世路紀程（節錄）

土肥慶民卿著

明治二十三年十二月十六日。（前略）。夜學友小川勝陳來話す、勝陳は結城の人、幼時父に從ふて和歌俳諧の道を學べりといふ。話頭偶々之に及ぶ、余問ふ發句と俳諧との區別は如何にと、勝陳言下に應へて曰く、俳諧とは總名なり發句とは元との連歌の初發の句を採りしより名けたり、蓋し發句は和歌の更に進歩せしものなり、何となれは三十一文字の歌は必しも最初より字數を之と制限せしに非ざるも句調の宜しき自らかく定まりしものにして、更に此數を短かくしたるもの即ち發句俳諧なればなり、されば之を學ぶに就ても先づ歌道に志し然る後發句に及ばゝ眞に高尙優雅の域に達し得べし、是れ物の發達順序を蹈むものにして進化論に所謂 Ontogenie ist eine Recapitulation der Phylogenie なる天則に從へばなりと說けり、余は此最後の一言を聞きてはたと膝を擊ち勝陳の話を遮ぎりて曰く善哉君の言や、余曾て思へらく凡そ天地の間無情の草木金石より有情の禽獸蟲魚さては人類に至るまで一として物理學の法則に支配されざるは莫し、即ち因果應報の理は是れ物力不滅を說くものにして感化薰育の人より人に及ぼして極りなきは猶ほ波動傳達の理のごとし、或は反動力は動力に均しきといひ異極相引き同極相排すといふが如き一

として活ける社會の情態を說明するに非さるは莫し、西哲は曰ふ政治家は社會學を學べと余は則ち改めて物理を學べと叫ばんと欲す、例へば我國の如き文化の未だ洽ねからざる邦に於ては理學を解する者とては年少の徒の一部分のみにして今日政治界に奔走する輩の如き多くは理學の一端をも心得ぬ者也、宜なり其言ふ所、行ふ所常軌を逸して顧みざるや、斯の如き徒に一國の政治を委ねんが、國家の前途や知るべき而已、要するに物理學の法則は啻に形而下に行るゝのみならず形而上にも適用して毫も矛盾する所なきを見るなり、われ今君か萬有學上の法則を詩歌の上に引用せるを聞きて覺にず我が平生の持論に及べり、請ふ更に君の俳論を聽くを得ん、勝陳曰く發句には必ず季節を入れざるべからず又 einen Satz を成さゞるべからず Subjekt und Praedicat を存せざるべからず、されど名句には此規則を破れるものはあり、例へば芭蕉の句に「かちならば杖つき坂を落馬かな」の類是なり、又發句には死の字を嫌へども芭蕉は「やがて死ぬけしきは見にず秋の蟬」と詠めり此等を有法之極終皈于無法とや曰はんか、余曰くシルレル詩伯の鐘の歌(Das Lied von der Glocke)に Nur der Meister kann die Form zerbrechen の語あり亦之と同意なり、蓋し物には一定の法則あり之れ無くんば則ち支離散漫して用をなさず、而も徒に法則に拘泥するは亦達人の所爲に非ず、故に一流一派の師とならんとせは吾人は須らく宮本無左志に學ばざるべからず、渠は廣く諸流を講究して然る後能く其二刀流を成せしなり、而も新派を樹つるには必ず舊流義の幾分を破壞せさるべからず、之を原流派より觀る寔に一個破門的の所業たり、併しながら、此新派を組立つる爲め諸流義を參酌したりしことも思へば新派の必ず不規則にあらざることを知るべし、此新流義を出すこと即ち鐘の歌に言へる模型を壞すは良匠の手を俟つの謂なり、又彼の日蓮を見よ始め天台家の小僧より成り上り、八宗を兼學して又神道をも修めたりといふに非ずや、なべて開祖ともなる人は此位の苦辛は覺悟せねばならぬものなり、シルレル、ケーテ等の詩すら當時其

破格を咎むる者ありき、蓋し法を曰ひ則と曰ふも、元は或人が人工的 Künstliche に定めたるものにして必しも萬世不易のものにはあらず、世の眼孔豆の如き者は徒らに規則〳〵と呼びて古人以外に法格を求むることを知らず憐むべきなり、然れども余は古法に違ふを非とするにはあらず、反て物事は必ず師傳を要すと思ふなり、師傳も受けざる人は決して上達することなし、只徒らに師說に拘泥するは凡庸の徒に過ぎずと謂ふのみ、勝陳額づき既にして又前說を續けて曰ふ、發句には俗語を避けよといふにはあらず、通俗の言辭をもよく優美に用ゆべしといふなり、俳優市川猿十郎(?)が河豚汁といふ題にて「河豚汁朝に道を聽いてから」といひしが如き是なり、我が父嘗て鎭守の祭に發句の會ありける折、之に倣ふてとろゝ汁といふ題を社中に與へ、自らは「友遠方より來るありとろゝ汁」と讀みて俗耳を驚かせしことあり云々と、余又曰ふ、君が俗語を奇麗に使ふといふことに就ては獨逸文學史を想ひ出すなり、獨逸文學の未だ盛ならざりし中世には獨逸語は卑俗にして到底詩語をなすに足らずとの說行はれて羅甸語若くは佛蘭西語が上流社會並に文人學者の間に專ら用ひられ、彼の英傑フリードリヒ大王の如きも詩を作るには必ず佛語を以てし、其離宮に名くるに亦「サンスーシイ」なる佛語を用ひたりしを見ても其一班を窺はる、我朝物徂徠の徒が自ら東夷と稱して我姓名をさへ俗なりとて荻生を改めて物部の物を採り喜び、一世を擧げて其顰に傚ひしと似寄の話なり、閑話休題斯の如く愍むべき獨逸文學も終には詩歌は必しも古語や他國語によらずとも優美なるを得へきのみならず、之に由らざれば獨逸文學の發達は得て期すべからずとの說出でたりしが、果してレッシング、クロップストック、ヘルデル、シルレル、ゲーテの徒其後相踵いで出で遂に獨逸の文學をして今日の盛有らしめ佛蘭西の文學は一時却て其下風に立つに至りぬ、是に由りて觀れば發句家が唱ふる所は、姑く發句と歌と孰れが優れるやの問題を差し措きて、之を詩歌發達の上より見て大に發明したる說と謂ふべし、序に言はんに日本の文學も矢張獨

逸風に自然に發達するなるべしと余は信ず、換言せば日本通俗の言語を使用し和文の法則を採り漢文と西洋文の法則を折衷したる即ち今日の新聞体の文章を完全に發達せしむれば佗年我文學が世界の文壇上に雄飛するの期あるべきは智者を待たずして識るべき也、勝陳又首肯す、暫くして曰く「ほとゝぎす鳴つる方をなかむればたゞ有明の月ぞ殘れる」の歌は「一聲は月か鳴いたかほとゝぎす」と俳人に依つて縮められたり、又「船とめて惜まんよりは有明の傾く方へ棹やさろまし」といへるを余は「明月や傾く方に棹さゝん」といへり、斯の如く發句の作者より見れば歌の三十一文字には冗字多く覺ゆるなりと、彼一語我一句、燈を剪つて深更に及べり、勝陳又書を能くす資性篤實謙讓にして人と爭はず、一見愚なるが如し、是を以て同人間善く其長を識る者少なし、蓋し當世稀に見るの君子也ヨ、

送土肥民卿之歐行

方今才子多ク、學者寡カラズ、而モ予ノ民卿ニ待ツ所ハ其學ト才トニ非ズシテ、實ニ其氣節ニ在リ民卿夫レ自重セヨ、

明治二十六年四月　　辱知　小川勝陳

右は土肥博士西遊の日、故人の書して贈らるゝ所。余請ふて之を讀むに語簡にして意長し。且つ筆力の雄深雅健ある一見して覺へず襟を正うするものあり。嗚呼是れ小川先生の性格を表はせるものにあらずや。

笠岡生又記

其三

京都醫科大學解剖學教室　島田吉三郎

乾坤一轉茲に明治四十二年の新春を迎ひ申候舊年中は毎度書信を頂き何時もなから疎音にのみ打過き候段御許し被下度候

却說舊臘故小川先生の遺聞感想あらは記し遣はす樣御申越に候ひしか荏苒今に及ひ是亦御海容被下度候

故小川先生か金澤に赴任せられ候て第一の講筵に侍りしは實に生等の「クラス」にて候へき此時先生の温容に接し篤實なる講義を聽き進んて實地の示導を受くるに從ひ諸生益々先生の高德を仰き愈敬慕の念深きに至り候事今更申上くる迄も無御座候斯くて生が母校の業を了へ鄉里に歸るの數日前先生の居を訪れ候て處世の訓戒を乞ひ候へしに說き聞け給ひし條々誠に先生が衷心より涌き出つる熱誠の句懇篤の語深く生が肝腦に銘して今に忘れさる所に有之其后生が東上するに及ひ過般雜誌上に揭けられ候ものと仝樣の運動會優勝記念なる照影を遙々下宿まで寄せられ申候照影の裏には誠に力の籠れる獨逸文にて

Nur ein
Guter Mann kann
ein guter Arzt
sein, so hat
Nothnagel
mit Recht
gesagt.

と能氏の語を筆せられ別に偉大なる敎訓を記されし一書を添へられ候されば生は爾後何れの地に住める時も亦如何なる職に就ける時も常に其訓戒を心と致し居り候而も弱行の身未た其敎化を完行し得難く居常先生の照影に對し奉り慚愧背汗の至りに存候然れども何れの時か此三條の敎化を具體する人となりて先生に面するの折あらんと期し候

へしに今や測らずも先生と幽明界を異にし往の教訓端なくも先生の遺訓と相成候今日に立到り申候事なれば今後益々之を遵守し獨り自ら已を愼みあくまでも此教訓を具體し且つ永久に殘させ給ひし照影に對しても慚愧背汗するなきに到らん樣孜々修養努めて怠らざる覺悟に御座候

尊き先生の書は只今書留郵便を以て御送り致候間御覽の上直に御返し被下度又切抜剪斷等の事決して無之樣堅く御願申上候

而して先生の此書は丁酉の年正月三日に物せられ申候ものにて今や年を更ふること實に一周支に及ひ恰も今日は正月三日にて偶此書を貴下に致すに際し往時を回想して故先生を追懷する念誠に難堪候　噫々

「寸楮遙に賀新正且祈足下心身之健全

御仝宿金子君及ヒ竹中君其他吾第四之學友諸彦ゟ御出會之節ハ可然御致聲相願候御約束之寫眞舊臘出來致候御承知之運動會時之紀念御笑納可被下候

病理両教授並に両助手ゟ拙刺差出候に付よろしく御取次願候又かねて御通話有之候なにか認メヨとの事なれ共生少より蟹文龜字にのみ志し科斗鳥跡には中々に疎く今更殘念此事に御座候小照裏面之能氏之語生の愛誦する所御玩味可被成候

生又曾聞素問黄帝之語云爲人之子不知醫道非孝子生曩不識斯語然生始志醫實在于玆而嚴父疾革之時生察死期於一日之前而延半日之壽學醫而所穫厘止于玆慚悔何勝敢告

亡父又規生以三曰

勉學攝生與言行

生今耻筆斯言而不能躬斯行敢告々々

丁酉初三　　未曾藏生

畠田君足下

當地元朝は鵝毛紛々昨日は曇今朝は珍しく日光を拜み候其代り寒氣は隨分烈敷來澤後小生は始めてと思ふ位に御座候

其四

京都醫科大學解剖學教授　鈴木文太郎

拜啓時下酷寒之候益御清勝奉賀候陳者今回島田君より承り候處貴下が弘く故小川君の爲め知人等より同君の性行逸事等に關する事項を蒐集さるゝやの由眞に御奇特の義と存候猶ほ小生にも何事かを記する樣御傳言有之候義委細承知仕候偖而同君の事に就ては既に貴下の御健筆にて十全會雜誌上に充分委曲を悉され候樣に存候其上小生等迄に徵發せられ候も別段珍話も無之却而蛇足かと存せられ候が御注文に應じ小生の所感丈にても相述ふべくと存候

小生は書生時代には同君とは少々學級も相違致居候事とて途上の挨拶位に止まりて親しく相往來交際せし事は無之候從て其時代の事は何等御報道の材料も無之其頃は本郷森川町邊に住はれ當時も相變らす細長き身体にて可なり蠻拵の方に有之候樣覺ゑ居り候

小生の金澤專門學校へ參り候は明治二十六年の秋にて全廿九年夏迄就職仕候小川君は小生より一年程後にて參られ候かと存候夫より以後は同僚として談話もし又用向き多くは小生よりの願用などにて同君の私宅へ罷出て病用などにて同君を煩した事も數次有之候其後小生は轉任仕候後も特に小生亡母の死する迄一方ならさる御世話を受けたる

事も有之候小生の金澤時代の頃は同君は稍爺染た樣に見受け小生などの突飛とは少々趣味も異なり禪學などには向ひ山雪門師の許へ出掛けられたるやに聞き候夫は直接君より聞きたる次第には無之矢張愚父などが生前雪門師方の例日に少々野狐尻りに出掛けた連中にて其の爲め聞きたる次第にて御座候先づ夫等にて別段深き臭れ緣的の間柄にも立到らず謂はゞ淡泊なる君子的の交際に過ぎず候但し君子的は小川君の方に有之候從て同君の逸事抔は小生も別段深き注意も致さず只時々同君の眞面目なる駄洒落に閉口せる位にて却て小生の如き失策澤山の人間は恐らく小川君の如き注意深き人より隨分研究せられ今時分は娑婆の鈴木か又々何かヤラカシタ位の評判有之候義かと存候

小生の金澤にて小川君と同僚たりしは約二年餘りにて君を知る事も從て淺く唯着實温厚の人とし居たり其後小生は京都に來たり又舊時の如く君と相接するの機會も無之金澤へ用向きに參りたる時に面會せる位にて候然るに其後追々と君の薫陶を受け金澤の學校より澤山卒業者出で社會に活動する樣に相成りたる其際君の行動を見るに能く夫等の人々の爲め深切なる世話をサルヽを見るに付漸く君の眞價を知るに至り以來君の人となりの如何に高きかに深く敬服仕候今の時代には隨分學術に勝ぐれたる人は澤山有之も人物と云ふ点に至りては敢て古も今も相變りたることなく却て生存競爭の劇烈と相成り候爲め節操などに至りては或は如何かと思ふ場合往々有之候又學者と云ふ連中にも只學術を覺えた職工の如き輩尠からずと存せられ候君の信義に厚かりし事は中々今時の人に得難き事にて金澤の學校にては此人の爲め學術以外に德義節操の点に於て偉大なる感化を受けたるは謂ふ迄もなき次第と存候實に今回學校か同君を失ふたるは誠に不幸の極と申すべき義に候乍去今後とても何卒同君に劣らざる熱誠忠實なる人を得らるヽ樣希望に堪へず候先者貴諭に從ひ小生の記憶に浮ひたる事柄及ひ所感迄如斯に御座候敬具

四十二年一月十六日

『前暑御宥免可被下候御母堂義一昨朝施術致候其後毫も御異狀なく經過被致候此段は御放念可被遊候右取敢ず乍暑儀以寸楮御報申上候也

小生は來月初旬貴地に罷越諸所拜觀致度と存候いつれ拜眉萬縷可申述候』

右は鈴木博士宛の端信にして明治三十四年三月發函し給ひしものなり顧ふに恩師先生には仝年三月廿九日より往復一週間の豫定を以て四年生引率者として京坂岡山福岡熊本長崎へ修學旅行をせられたる事あり斯る飛脚的旅行を試むるに就て仝行者中睡眠不足を來す恐ありと眉を顰めたるものあるに對して「最薄弱の仝行者が耐へ得る迄豫定を實行する事」との條件を附し無恙歸校し給へり、而して此旅行は我が母校に於ける最終の長途修學旅行なりき――八田生附記

其五

京都醫科大學解剖學教室　岡島敬治

○追想一二

一先生の趣味の一面が頗る究理的であつた事は誰でも知つて居る。たしか三十年か三十一年のことであつたらうと思ふ。自分か一二年生の頃だつた。先生は其頃新しく出版せられた獨書の Richter の解剖學を一冊購はれた、挿畫の極めて少ない、實用的の書であつたが、我々實地家の參考にはこれで充分だと言つて居られた。自分は其書をしばらく借りる事にして、或る日先生の宅から持つて來て見た。例の先生の着實で廉儉な氣質からして、本にはきちんと厚紙で覆ひがしてある。そして其上に譯して書いてあるには、『理非照―解剖學』。判官の Richter を理非照とは至極妙ではないか。有繫は先生緻密で有趣な頭腦かなと自分は感服したのである。

一先生の萬事につけて究理的なことを證明する事柄はまだ外にいくらもある。人も知る通り先生には一人の愛孃と一人の令息がある。令孃を加女子、令息を勝利と命名せられた。加賀で生れたから加女子である、日露戰爭が大捷した年に生れたから、自分の名の勝の一字を取つて、勝利としたと言つて居られた。加女子といひ、勝利といひ、共に女の子、男の兒にふさはしい、誠に美くしい名ではないか。

一先生の講義は獨特であつた。他人は知らぬが、自分は今でも先生の講義の深い印象を持つて居る。長い年月を經ては居るが、其內容的で、形式的でない、談話的で、朗讀的でない講義を思ひ浮べると、あり〳〵と書いたものを讀むやうに頭の內に映つて來る。特に其際與へられた語學の觀念は、自分か生涯を通じての無形の財產である。先生の婦人科產科の時間は、また同時に語學の時間であつた、先生の羅典語の課外講義の時間はまた同時に一般醫學の時間であつた。先生は部分的の人ではなく概念的の人であつた。先生は散開的の人ではなく綜合的の人であつた。一先生は極めて意志の堅固な人であつた。人も知る如く、先生は至つて寡言で、沈着で、內氣な氣質の人であるのに、其修められた學科は案外なるかな、先生の性質と全然反對の夫を要する婦人科產科であつた。先生はどうして此學科を修められたのであるかと問ふたら、答へて言はるゝには、『人間は好な事には上達するが、好に乘して過失もし易い、それに反して、嫌ひな事にははじめ一向乘氣がしないか、さてその代り、一度堂に入つてしまへば眞の上達の域に達し得ることが出來る。だからして自分は最も嫌ひで、最も不得手な學科故に撰んだのだ』と。先生にしてはじめて此考ひが起り、此難事を實行することが出來たのだ。意志の弱い凡人には必ず眞似の出來ない事である。そして先生は、其學界に於て令名嘖々たるものかあつた。

さゞめきに人の子喘く聲いとひて、耳に掌せしか汚おほき世を。

○

つと觸れしたびをば幸のあつかりき、嬰兒生らせしろの手冷へける。

敬治

内務省防疫課長　野田忠廣

（前略）陳者小川君御逝去に就ては御同樣哀悼の至に堪へず小生義は在大學中同君と僅に一年を異にし私立獨逸語學校に於ても永く敎鞭を共にし又小生の鹿兒島病院より貴地醫學部に赴任の際の如き全く同君の斡旋に依りたるものにして常に同君に兄事したる一人に候同君の御病氣は初めて去年六月「コッホ」氏歡迎會場にて山碕君より傳聞し其後經過大要は村上君よりの御通報にて承知仕候に付日夜其御快復を祈居候處突然過般の御訃音に接したる次第にして當時小生の感慨は蓋し永く師事せられたる貴兄等に讓らずと信じ候今尙家族と共に在澤中の交誼を語り又遺族の御胸中を推察し一同哽咽袖を沾すを禁し難く罷在候同君の性行等に關しては既に十全會雜誌に詳記相成候に付他に小生等の蛇足を添ふる餘地無之眞に溫厚篤實の君子にして常に忠孝信義を重んし又學者として專門醫學に就ては申す迄もなく其他殊に文學に關する造稽頗る深く人格學識両つなから內外の敬慕に値すへき理想的模範敎授と評するの外無之と存候實は御要求も有之何か同君の逸事として記し度と考居候へしが特に紙上に掲くるに足るへき事項も思出ず候間御了知相成度如斯に御座候敬具

一月二十日